

# 舞子・東石ヶ谷遺跡Ⅱ



神戸市教育委員会 1990

舞子・東石ヶ谷遺跡 II 正誤表

P9 34 行目	浮いた状態で <u>が</u> 炭化材	→ 浮いた状態で炭化材
P19 1 行目	出土した壺形土器で、	→ 出土した鉢形土器で、
P21 5 行目	その <u>内</u> 面	→ その <u>外</u> 面
P24 29 行目	SK01 1.6 <u>~</u> 1.3m	→ SK01 1.6 <u>x</u> 1.3m
図版3 1.	SB01 炭化材出土状況 ( <u>西</u> から)	
	↓	
	SB01 炭化材出土状況 ( <u>北</u> から)	
図版3 2.	SB01 炭化材出土状況細部 ( <u>北</u> から)	
	↓	
	SB01 炭化材出土状況細部 ( <u>西</u> から)	
図版4 1.	SB01 ( <u>南</u> から)	→ SB01 ( <u>東</u> から)

# 舞子・東石ヶ谷遺跡Ⅱ

1990

神戸市教育委員会



## 序

神戸の名勝舞子浜を望み、遠くには家島、生駒山系、紀淡海峡を一望にできる舞子丘陵は、神戸市域で最も横穴式石室の集中することでも知られています。古くは江戸時代の文献にも現れ、「岩屋」「石窟」として今日に至るまで広く市民に親しまれてきました。

1950年代後半より、舞子丘陵上の数多くの古墳が調査され、幾多の成果を納めてまいりましたが、今回同じ丘陵上にある弥生時代の集落の実態の一部が明らかになりました。弥生時代中頃から終わりにかけて、関東地方以西に数多く出現する高地性集落の一つであり、畿内への西からの玄関口である明石海峡を一望にするこの集落の意義は高いものと考えられます。

今回の発掘調査で明らかになりましたその成果を、ここに報告書としてまとめることができました。広く市民の皆様にご活用いただければ、幸いに存じます。

発掘調査および本書の刊行にあたり多くの方々のご協力を得ました。最後になりましたが、厚くお礼申し上げます。

平成2年3月31日

神戸市教育長 福尾 重信

## 例　　言

1. 本書は、舞子・東石ヶ谷遺跡第二次発掘調査の報告書である。
2. 当遺跡は、神戸市垂水区の舞子丘陵上に分布する遺跡で、今回の調査地は垂水区舞子坂3丁目に所在する。
3. 発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、神戸市教育委員会が、株式会社浅沼興産から委託を受けて、1988年8月29日から同年11月30日までの間に実施したものである。発掘調査面積は2700m<sup>2</sup>である。
4. 発掘調査組織

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

小林 行雄 京都大学名誉教授

宮本長二郎 奈良国立文化財研究所

檀上 重光 神戸市立博物館副館長

教育委員会事務局

教育長 褚方 学

社会教育部長 岡村二郎

文化財課長 西川知佑

埋蔵文化財係長 奥田哲通

文化財課主査 中村善則

事務担当学芸員 渡辺伸行、西岡巧次

調査担当学芸員 丸山潔、松林宏典

5. 遺構実測は丸山、松林、古屋浩、今村直子、遺物実測は谷川京子、丸山、原稿執筆は丸山、松林、編集は丸山が担当した。

6. 遺構・遺物の写真撮影は丸山が行ったが、遺物については、京都市埋蔵文化財研究所牛嶋茂、村井信也両氏にご指導いただいた。航空写真は株式会社国際航業の撮影によるものである。

7. 調査参加者

補助員 古屋浩、今村直子

整理員 大前厚美、奥さおり、北野康子、谷川京子、遠山育子、畠谷敦子

## 目 次

### 序

### 例言

第Ⅰ章	はじめに	1
第Ⅱ章	周辺の遺跡と舞子・東石ケ谷遺跡	3
第Ⅲ章	調査の概要	9
1.	堅穴住居	9
S B01		9
S B02		14
S B03		15
S B04		15
S B05		16
S B06		18
S B07		20
S B08		21
2.	掘立柱建物	22
3.	その他の遺構	24
4.	石 器	28
5.	玉 類	31
第Ⅳ章	まとめ	32

### 挿図目次

図 1	東石ケ谷遺跡と舞子古墳群	2
図 2	周辺の遺跡	5
図 3	S B01炭化材出土状況	10
図 4	調査地区全体図	11・12
図 5	S B01平面・断面図	13
図 6	S B02平面・断面図	14
図 7	S B03平面・断面図	15
図 8	S B04平面・断面図	16
図 9	S B05平面・断面図	17
図10	S B06平面・断面図	19
図11	S B07平面・断面図	20
図12	S B08平面・断面図	21

図13	掘立柱建物平面図(1).....	22
図14	掘立柱建物平面図(2).....	23
図15	掘立柱建物平面図(3).....	24
図16	S K01平面・断面図.....	25
図17	S K03遺物出土状況.....	25
図18	弥生時代中期土器.....	26
図19	弥生時代後期土器.....	27
図20	石鎌(1).....	28
図21	石鎌(2).....	29
図22	石錐.....	29
図23	砥石.....	30
図24	石斧・投弾.....	30
図25	削器.....	31
図26	玉類.....	31

#### 写真図版

図版1	1. 調査地周辺航空写真			
図版2	1. 調査地区航空写真			
図版3	1. S B01炭化材出土状況	2. S B01炭化材出土状況細部		
図版4	1. S B01	2. S B01		
図版5	1. S B02	2. S B03		
図版6	1. S B05	2. S B05		
図版7	1. S B05土器出土状況	2. S B04		
図版8	1. S B06	2. S B06ピット内土器出土状況		
図版9	1. S B07	2. S B08、S D01		
図版10	1. S B09	2. S B09柱穴内土器出土状況		
図版11	1. S B10	2. S B11		
図版12	1. S B12	2. S B13		
図版13	1. S B14	2. S B15・16		
図版14	1. S B17	2. S B18		
図版15	1. S B22	2. S K03土器出土状況		
図版16	出土遺物			
	1. S B09	2. S D01	3～5. S D05	
図版17	出土遺物			
	1・2. S B06	3. S B07	4. S B08	5. 石鎌

## 第Ⅰ章 はじめに

### 1. はじめに

#### 位置

舞子・東石ヶ谷遺跡は、神戸市の西端、垂水区舞子坂3丁目に位置する。舞子浜から北へ約1.7km入ったところ、舞子丘陵の主尾根から南へ延びる比較的平坦な支尾根上に立地し、標高は83m前後である。付近の水田面との比高差は約75mを測る。晴れて空気の澄んだ日には、西は家島群島、南は淡路島から紀淡海峡、東は生駒山系を眺望することができる。

#### 現況

舞子は、松の名勝とされる舞子浜と、その中にうかびたつ移情閣など古くから風光明媚な地として知られている。山田川下流の狭小な平野部は住宅街として発展してきている。近年は、阪神間のベットタウンとして、また人口増加に伴い、急速に宅地開発が展開され、丘陵部においても次第に頂部に至るまで家々が建ち並ぶようになってきた。

#### 遺跡の発見

丘陵上には、舞子古墳群として古墳時代後期の横穴式石室が数多く分布することが古くから知られていた。かつては100基近くが存在していたようであるが、早い段階の開発などで破壊され、現在では20基ばかりが残るのみである。1960年代後半頃からこの丘陵一帯で弥生時代の遺物の散布が知られるようになり、土器片や石器などが採取され、弥生時代の遺跡の存在が注意されてきた。

この遺跡で弥生時代の遺構が確認されたのは、1982年の舞子古墳群東石ヶ谷1号墳の調査の際で、後期の円形竪穴住居址1棟が検出されている。<sup>注1</sup> 1984年にはその北方に隣接する地区で後期の円形竪穴住居址2棟、方形竪穴住居址1棟を検出している。<sup>注2</sup> さらに、1986年には今回調査地の南東に隣接する地区で調査が行われ、削平された毘沙門1号墳とともに後期の竪穴住居址1棟が検出されている。<sup>注3</sup>

#### 遺跡の命名

本遺跡は從来舞子坂遺跡と称されていた。同丘陵上にある舞子古墳群の支群名は古くから字名などを用いて呼称しており遺跡の位置をより理解しやすいものにしてきた。1984年の調査の際もそれにならい字名をとって舞子・東石ヶ谷遺跡と命名された。しかし、今回の調査地は字「東石ヶ谷」には含まれないが、遺跡の構成などからみて一集落をなすものと考えられ、同じく舞子・東石ヶ谷遺跡と称することにした。

### 2. 調査に至る経緯と経過

#### 調査に至る 経緯

1987年度に申請されたマンション建設の事前審査に伴い、1988年3月に試掘調査を行ったところ、調査地区全域に遺構の分布することが確認され

豎穴住居址などを含む弥生時代の遺構の存在が明らかとなった。この結果をうけて、1988年度に全面発掘調査を実施することとなった。

#### 調査の経過

調査は、1988年8月29日より重機による表土掘削を行ったのち、9月8日より人力による掘削を行った。11月2日にはほぼ全ての遺構の検出を終えた。11月7日にヘリコプターによる航空写真撮影を行い、以降は各遺構の写真撮影および実測図の作成にあたった。11月27日に現地説明会を開催し、約330名の見学者を得た。11月28日で現地における作業をすべて終了し、11月30日に発掘機材の撤収を完了した。

註1 口野博史 「舞子古墳群東石ヶ谷1号墳」『昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』1985

註2 渡辺伸行・菅本宏明 「舞子・東石ヶ谷遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』1986

註3 山本雅和 「舞子古墳群毘沙門1号墳」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』1989

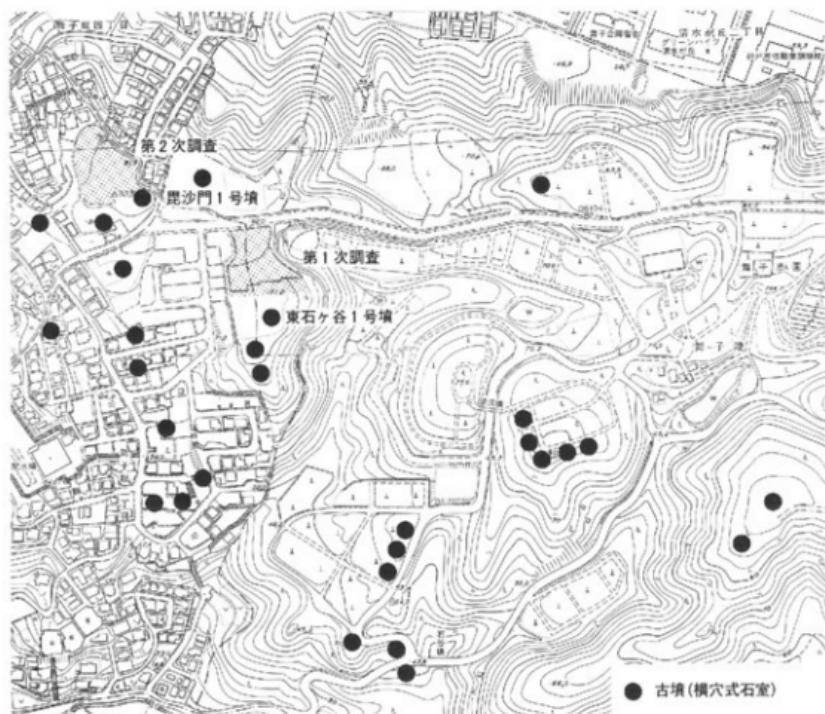


図1 東石ヶ谷遺跡と舞子古墳群

## 第II章 周辺の遺跡と舞子・東石ヶ谷遺跡

先述したように、舞子・東石ヶ谷遺跡は山田川左岸の丘陵上に立地する。遺跡の多くは、山田川下流の狹小な平野部よりもその左右岸に延びている丘陵上に展開している。ここでは山田川流域を中心として、特に舞子・東石ヶ谷遺跡の属する弥生時代については周辺の地域も含めて、その歴史的環境を概観したい。

### 先土器時代

遺構は伴わないが、山田川流域においても先土器時代の遺物が採取あるいは出土しており、すでにこの時代から生活が開始されていたことをしめしている。縄紋時代の項で改めて紹介するが、大歳山遺跡でナイフ形石器が数度にわたって採取ないし出土している。今回の調査地に南接する昆沙門2号墳の発掘調査の際にはナイフ形石器1点が出土している。

### 縄紋時代

1920年代、直良信夫の地道な調査研究によって著名となった大歳山遺跡は、また前期の「大歳山式土器」の標識遺跡としても知られている。大歳山遺跡は、山田川下流平野部の奥、東から西に延びた丘陵頂部の平坦面に位置し、過去数度にわたって遺物の採取および発掘調査が行われている。明確な遺構は伴わないが、縄紋土器のほか各種の石器類など多くの遺物が発見されている。遺跡の最盛期は前期後半頃とされ、また晩期の遺物も知られていたが、最近の土器の整理の結果、早期末から中期および晩期の土器が確認されている。このほか、舞子陵および狩口台周辺では、縄紋時代に属すると考えられる石鏡が採取されている。舞子浜では円筒棺の発掘調査中に縄紋時代後～晩期の土器片数個が出土している。JR垂水駅近くの垂水・日向遺跡では中期および後期の土器が福田川の氾濫原から出土している。

### 弥生時代

縄紋時代に続いて大歳山遺跡では、前期中葉から後期にかけて集落が営まれている。過去数度の発掘調査により後期の方形の竪穴住居5棟以上を検出している。

中期に入ると、山田川をはさんだ東西の丘陵上に集落が現れ始める。狩口台遺跡は、古くから弥生土器が採取され弥生時代の遺跡の存在が予想されていたが、最近の調査で中期と後期の竪穴住居5棟以上が検出されている。また、第II様式の土坑から紀伊産彌形土器が出土している。紀伊産彌形土器は、明石川流域の中葉のいくつかの遺跡で発見されており、淡路島を眼前に望む狩口台遺跡は、淡路島を通した紀伊との交流の玄関口の一つと考えられよう。このほか、今回報告する舞子・東石ヶ谷遺跡も中期から

営まれはじめる集落である。

中期には、低地における一般的な農耕集落とは性格を異にする高地性集落の発生がある。舞子・東石ヶ谷遺跡もそのうちのひとつである。周辺の瀬戸内沿岸にはいくつかの高地性集落が存在するが、それらは大きく六甲山地南麓と明石川流域の2つに分けられる。六甲山地南麓では、主なものとして東側の甲山(付近の水田面との比高200m)から、五ヶ山(同110m)、城山(同250m)、会下山(同110m)、森奥(東山)(同150m)、金鳥山(同210m)、保久良神社(同150m)、荒神山(同200m)、桜ヶ丘B地点(同60m)、伯母野山(同160m)、布引丸山(同80m)、鉢伏山(同230m)そして、舞子・東石ヶ谷の各遺跡がある。これらは、いずれも中期のうちにはじまり、後期まで継続して営まれている。

一方、明石川およびその支流流域では、西神ニュータウン内第50号地点(比高64m)、同第65号地点(同68m)、青谷(同70m)、頭島山(同74m)の各遺跡があり、第Ⅰ様式末の土器を出土する集落もあるが、いずれも第Ⅳ様式に最盛期を示し第Ⅳ様式のうちに廃絶するという特徴を有する。これらは、最近のサヌカイト製造物の分析からも摂津色の濃い遺跡で、明石川下流域の新方遺跡などの播磨色の濃い集落と対立関係にあり、後期に続く高地性集落が見られないことからも、その対立は第Ⅳ様式のうちに終わったものと考えられる。この明石川流域の対立が、畿内・摂津勢力とそれ以西の播磨を含めた勢力との対立の接点であり、舞子・東石ヶ谷遺跡はまさに畿内・摂津勢力の最西端の基地として位置づけられよう。

後期に入ても狩口台遺跡や大歳山遺跡、舞子・東石ヶ谷遺跡では集落が営まれているほかは、舞子陵や東谷公園などで土器片などが採取されているにすぎない。このうち、大歳山遺跡と東谷公園では銅鏡が発見されており、これら丘陵上の遺跡にとり開まれるように投ヶ上からは扁平錐式六区袈裟襷紋の銅鐸が発見されている。また、帝釈遺跡からは上鍤が、西岡橋遺跡、狩口台遺跡、大歳山遺跡、舞子・東石ヶ谷遺跡からは坂靖壺が出土しており、山田川流域の可耕地の狭小さからも、この地域は農業集団として自立しながらも漁撈活動にも携わっていたものと考えられる。

#### 古墳時代

山田川流域の前期古墳としては、すでに姿を消してしまって現在では遺物しか知られていないが、大歳山で小型の素文鏡や石剣、勾玉などが採取されており、粘土櫛を主体部とする四世紀末頃のものと考えられている。

垂水丘陵先端部に、四世紀末頃築造された県下最大の五色塚古墳は、全長約194mで幅10mの周濠をめぐらす三段築成の前方後円墳である。五色塚古墳に西接する小壺古墳は、径67mの二段築成の円墳である。五色塚古



- |              |                |
|--------------|----------------|
| 1. 舞子・東石ヶ谷遺跡 | 9. 帝釈遺跡        |
| 2. 舞子塚遺跡     | 10. 投ヶ上銅鐸出土地   |
| 3. 大歳山塚跡     | 11. 東田遺跡       |
| 4. 舞子浜遺跡     | 12. 五色塚古墳、小壹古墳 |
| 5. 垂水・日向遺跡   | 13. 歌敷山東古墳・西古墳 |
| 6. 狸口台遺跡     | 14. 舞子古墳群      |
| 7. 東谷公園内遺跡   | 15. 多聞古墳群      |
| 8. 西岡塚遺跡     |                |

図2 周辺の遺跡

墳の西方約500mに、戦前に調査された、歌敷山東古墳・西古墳がある。<sup>註4</sup>  
いずれも粘土被を主体部とする円墳である。舞子公園一帯では、埴輪円筒棺が現在までに3基発見されており、公園内にはまだいくつか眠ったままであると予想されている。<sup>註5</sup>

これら中小の古墳はすべて五色塚古墳とほぼ同時期かやや遅れての築造と考えられている。五色塚古墳は明石海峡を眼下に見下ろす位置にあり、海峡と水上交通を掌握していたとみられている。ただ、これらを築いた豪族が在地のものなのか、畿内から海峡掌握のために派遣されたものなのか意見がわかっている。

後期に入ると、古墳の規模は縮小し、築造しうる階級は急増する。大歳山2号墳は、全長28mの前方後円墳で横穴式石室を主体部とする。主体部の調査はなされていないが、6世紀前半の須恵器や菱錦須恵器壺の破片と小像などが発見されている。

このころになると各地で群集墳が営まれはじめ、山田川流域においても両岸の丘陵上にいくつかの群集墳が認められる。舞子丘陵上には舞子古墳群があり、かつては約100基存在したとされるが現在は約20基を残のみとなっている。これらは、立地する尾根によって、星陵台・舞子台・山田台・尼ヶ谷・東石ヶ谷・西石ヶ谷・毘沙門・東市ヶ坂・西市ヶ坂の各支群にわけられる。一方、右岸には南北約2kmにわたって多聞古墳群が存在するが、大部分は早い段階に破壊され、充分な調査は行い得ていない。これも立地により、西脇・大塚ヶ平・たつか・深谷・帝釈・朝霧の各支群に分けられる。このうち、大塚ヶ平15号墳と深谷1号墳には組合せ式家形石棺をおさめており、朝霧支群のきつね塚古墳は二重の周濠を有する墳丘径25mの円墳である。

山田川流域では、現在までに古墳時代の集落址は発見されておらず、これらの群集墳を奥津城とする集団については今後の検討課題である。

- 註1 山口卓也・真野 優 「神戸市垂水区における旧石器」『旧石器考古学』21 1980  
春成秀爾 「神戸市大歳山遺跡の旧石器」『旧石器考古学』22 1981
- 註2 丹治康明 「舞子古墳群毘沙門2号墳」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』1988
- 註3 直良信夫 「播磨国明石郡垂水村山田大歳山遺跡の研究」 1926  
直良信夫 「近畿地方に於ける繩紋土器の研究」『考古学雑誌』16-6・12、17-4  
1926, 1927
- 註4 中村苦則 「播磨大歳山遺跡1-繩紋土器-」『神戸市立博物館研究紀要』3 1986
- 註5 真野 優 「明石地域の繩紋時代」『神戸古代史』3-1 1986

- 註6 神戸新聞社会部編 「祖先のあしあと」IV 1960
- 註7 1988年度神戸市教育委員会調査
- 註8 赤松啓介他 「大歳山－第1次発掘調査概報－」(“Culture”特別号) 1963  
大谷大学考古学研究会編 「'69 大歳山－決着に時効は無い！－自主報告書」 1972  
神戸市立考古館編 「地下にねむる神」の歴史－発掘現場からの報告－』 1980
- 註9 1989年度神戸市教育委員会調査
- 註10 紅野芳雄 「考古小録」 1940
- 註11 折井千枝子・岡田 務 「仁川五ヶ山弥生遺跡－No.4 地点の調査報告－」西宮市文化財資料14 1975
- 註12 村川行弘 「芦屋城山遺跡調査概報」『芦屋市文化財調査報告』1 1959
- 註13 村川行弘・石野博信 「今下山遺跡」芦屋市文化財調査報告3 1964
- 註14 宮本郁雄 「本山町東山遺跡－第3次調査－」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』1988
- 註15 石野博信 「神戸市金鳥山遺跡－保久良神社銅戈出土地の裏山』『古代学研究』48 1967
- 註16 樋口清之 「摂津保久良神社遺跡の研究」『国学院大学駒込会紀要』4 1942
- 註17 阿久津久・浅岡俊夫・石野博信 「荒神山遺跡調査概報」神戸市文化財調査報告14 1970
- 註18 神戸市立考古館編 「地下にねむる神」の歴史－発掘現場からの報告－』 1980
- 註19 若林 泰・齊藤英二 「伯母野山弥生遺跡」神戸市文化財調査報告6 1963
- 註20 小林行雄 「神戸市布引丸山の弥生式土器」『考古学』6-4 1935
- 註21 「神戸の遺跡」『新修 神戸市史』歴史編I 自然・考古 1989
- 註22 神戸市立考古館編 「地下にねむる神」の歴史－発掘現場からの報告－』 1980
- 註23 千種 浩 「西神第65号地点遺跡」『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』1986  
千種 浩 「西神第65号地点遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』1987
- 註24 赤松啓介 「神戸市垂水区青谷遺跡出土の石戈(1)－弥生社会の一試論－」『考古学雑誌』59-3 1973
- 註25 宮本郁雄・菅本宏明 「頭高山遺跡」『昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』1985  
菅本宏明・森田 稔 「頭高山遺跡」『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』1986
- 註26 薫科哲男・丸山 潔・東村武信 「サヌカイトの流通から見た弥生時代播磨国境地域の交流関係」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』1989
- 註27 丸山 潔 「新方遺跡発掘調査概要」1984
- 註28 島田貞彦 「播磨国明石郡垂水村発見銅鐸」『考古学雑誌』19-2 1929  
直良信夫・直良勇二 「垂水村新発見の銅鐸とその出土状態」『考古学雑誌』19-2 1929

- 註29 「兵庫県 真野修氏資料」『海の生産用具－弥生時代から平安時代まで－』資料集 2  
(埋蔵文化財研究会第19回研究集会資料) 1986
- 註30 真野 優 「原始・古代の飯蛸壺繩漁の検討」「神戸古代史」8 1989
- 註31 兼康保明 「明石川流域の弥生遺跡」1,2 「武陽史学」5-1,2 1971, 1972
- 註32 春成秀爾 「神戸市大歳山の古墳はか」『兵庫考古』15 1981
- 註33 喜谷美宣 「史跡五色塚古墳環境整備事業中間報告」I 神戸市文化財調査報告13  
1970  
神戸市教育委員会編 「史跡五色塚古墳 復元整備事業概要」1982
- 註34 梅原木治 「垂水歌敷山古墳の調査」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』8 1931
- 註35 神戸新聞社会部編 「祖先のあしあと」IV 1960
- 註36 大谷大学考古学研究会編 「'69 大歳山－決着に時効は無い！－自主報告書」 1972
- 註37 森田 稔 「舞子古墳群西石ヶ谷1・4号墳」「昭和56年度 神戸市埋蔵文化財年報」  
1984
- 宮本郁雄・渡辺伸行 「舞子古墳群西石ヶ谷3・6号墳」「昭和56年度 神戸市埋蔵  
文化財年報」1984
- 日野博史 「舞子古墳群東石ヶ谷1号墳」「昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報」  
1985
- 日野博史 「舞子古墳群東市ヶ坂3号墳」「昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報」  
1987
- 丹治康明 「舞子古墳群昆沙門2号墳」「昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報」1988
- 山本雅和 「舞子古墳群昆沙門1号墳」「昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報」1989
- 後神 泉・佐伯二郎 「神戸市垂水区舞子古墳群の分布および測量調査報告」神戸大  
学考古学研究会調査報告 1 1988
- 註38 兵庫県立飾磨工業高等学校郷土史部編 「多聞群集墳発掘調査略報」「かれすすき」3  
1967
- 註39 神戸市立考古館編 「地下にねむる神」の歴史－発掘現場からの報告－」 1980

### 第III章 調査の概要

今回の調査は、毘沙門2号墳の北に隣接する約2700m<sup>2</sup>について全面発掘調査を行った。調査地は丘陵尾根上の平坦部で、耕作などによる造構面の削平が著しく、遺物包含層は全く存在せず遺物の出土はほぼ造構内に限られる。ただ平坦面から斜面にかかるあたりに僅かに自然堆積土（灰黄色粘質砂）がみられ、平坦面では表土直下で地山が現れるような状態であった。自然堆積土中より、図18-3・5のような土器が出土している。

灰黄色粘質砂 (3)は、直口の壺形土器で口頸間に櫛描直線紋を3帯巡らす。第III様式、(図18-3・5)おそらく古段階のものであろう。

(5)は、受口状の口縁部を有する壺形土器で、口縁部外面に凹線紋2帯を巡らす。第IV様式に属するものであろう。

検出された造構は、竪穴住居8棟、獨立柱建物16棟などで、これらはいずれも弥生時代中・後期に属する。獨立柱建物は、その柱の配列から平地式と考えられるもの10棟、高床式と考えられるもの6棟に分類できる。

#### 1. 竪穴住居

S B 0 1 (図5) 西南西に傾斜する地点に構築されているため、床面の一部は流出しているが長径7m、短径6mの楕円形の竪穴住居である。柱穴は9個で円弧状に並ぶ。住居は火災によって廃棄されたらしく、床面には多くの炭化材が密着していた。中央土坑は2基存在し、いずれにも炭化材が落ち込んでいたので2基とも同時に使用されていたようである。北側の1基は長径70cm、短径55cm、深さ25cm、南側は長径1.1m、短径60cm、深さ20cmを測る。また、2基の中央土坑の間には幅20cm、深さ10cmの所で充填された溝状の土坑が存在し、中央土坑とともに機能していたと考えられる。周壁溝は斜面の高い南辺付近のみ存在し、住居内で約四分の一周したのち、南西付近ではほぼ直角に曲がって1.7mほど延び、そのうち西方へ曲がりくの字形を呈して斜面上へでている。

(図3) 炭化材の残存状態は比較的良好であったが、支柱・棟木・梁などと思われるものも、具体的にどの材がどの部分の構造を造ったのかは明瞭でない。東側の壁面や周壁溝に接して径10cm前後の炭化材が立った様な状態で検出され、垂木ではないかと考えられる。また南東壁から中央土坑にかけて、途中で幾度か切断されているが、3.5mほどの垂木とおもわれる柱材が2、3本観察された。さらに、住居内に床面から浮いた状態でが炭化材に混じって焼土がみられ、屋根に粘土が塗られていた可能性も考えられる。

出土土器

(図18-4・  
12)

(4)は、壺形土器の口縁部であるが、全体の器形は想定できない。

(12)は、甕形土器の口縁部で、端部を上方へつまみ上げており、凹線紋出現以後のものであろう。

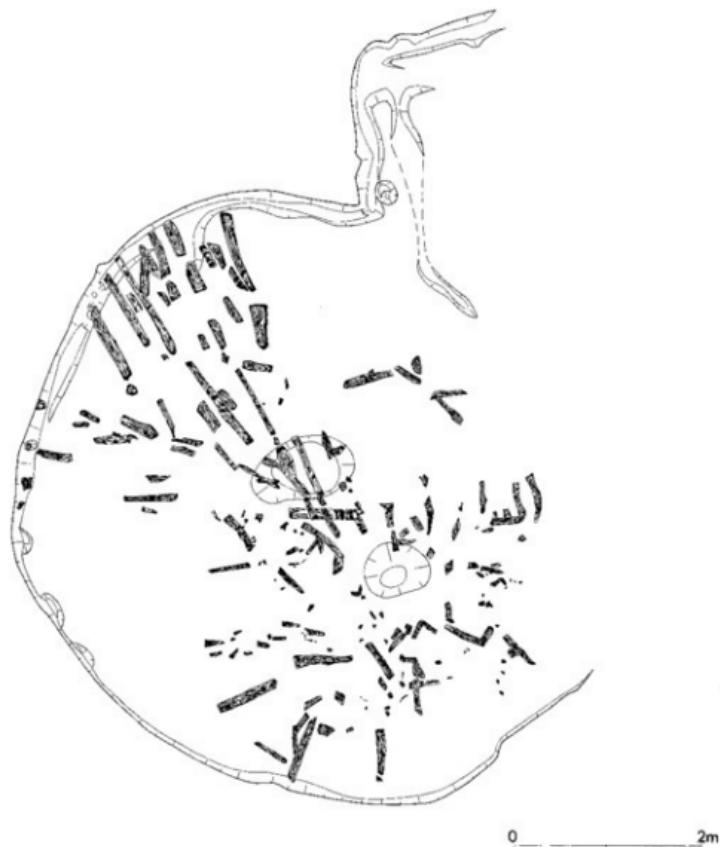


図3 SB01炭化材出土状況

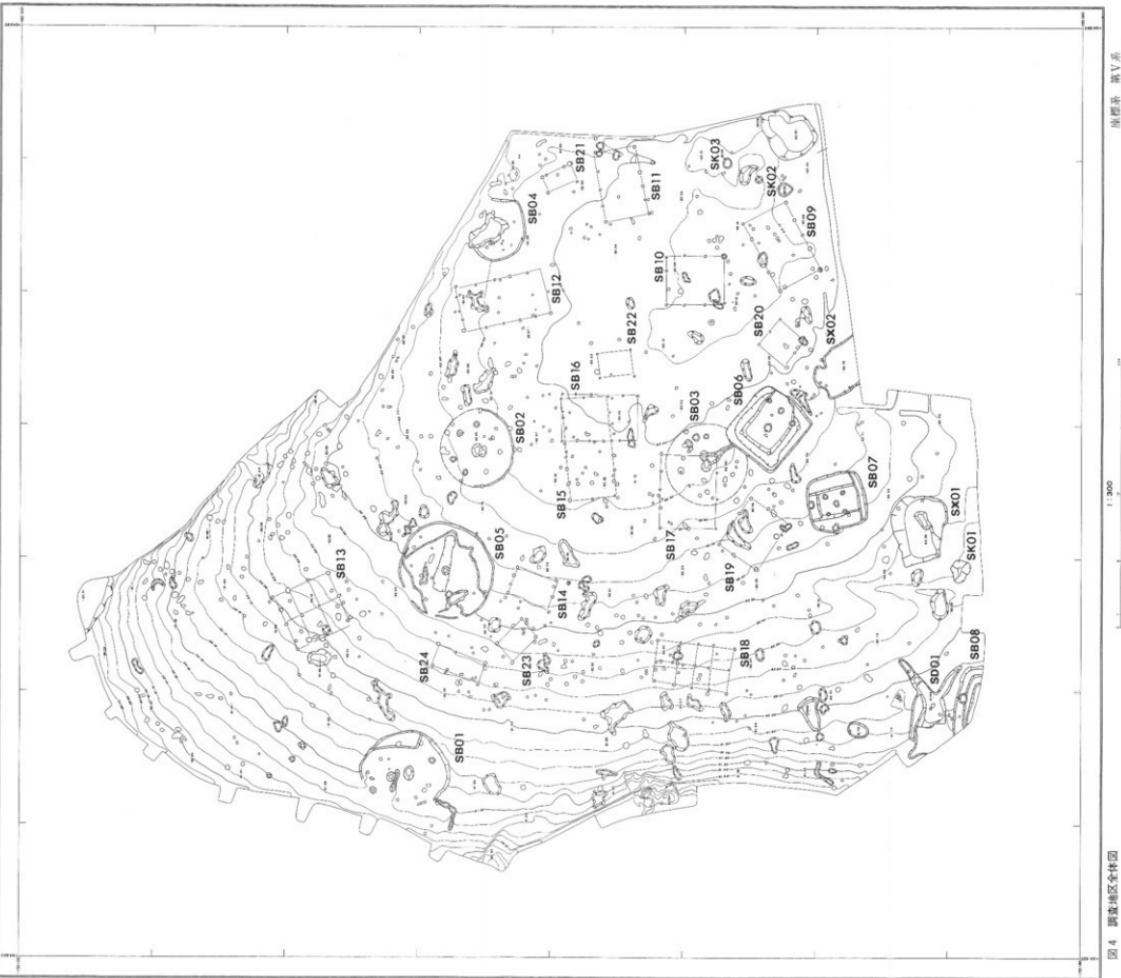


図4 調査地区全体図



- |                   |                            |                       |
|-------------------|----------------------------|-----------------------|
| 1. 暗茶色粘質土(一部炭を含む) | 10. 所茶褐色粘質土                | 19. 暗灰褐色粘質土           |
| 2. 黄褐色粘質土         | 11. 乳灰茶色粘質土(少し赤味をおびる)      | 20. 暗系灰褐色粘質土          |
| 3. 暗黄褐色粘質土        | 12. 暗乳灰茶色粘質土(少し赤味をおび、炭を含む) | 21. 茶灰褐色粘質土(灰と一部炭を含む) |
| 4. 茶褐色粘質土         | 13. 暗灰茶色粘質土                | 22. 乳茶褐色粘質土           |
| 5. 灰茶色粘質土         | 14. 黄褐色粘質土                 | 23. 暗乳茶褐色粘質土          |
| 6. 灰層(上部に少し炭を含む)  | 15. 灰黃茶色粘質土                | 24. 暗棕褐色粘質土           |
| 7. 暗褐色粘質土         | 16. 暗灰黃茶色粘質土               | 25. 炭層                |
| 8. 暗灰茶褐色粘質土       | 17. 灰層(6.よりも炭多く、黒っぽい)      | 26. 棕茶色粘質土            |
| 9. 暗茶灰褐色粘質土       | 18. 灰黃褐色粘質土                | 27. 暗灰褐色粘質土(炭を含む)     |

図5 S-B01平面・断面図

## S B 0 2

(図6)

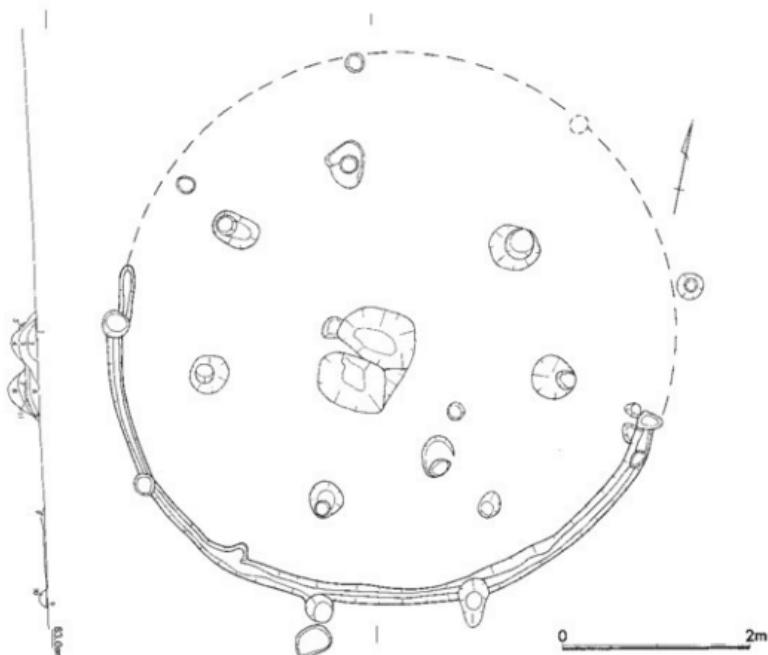
円形の竪穴住居であるが、削平によって周壁溝の南半部約2分の1が残されるのみで周壁はまったく残存していない。残された周壁溝からの復元では、直径6m程度であったと考えられる。柱穴は7個で、周壁溝上にもほぼ等間隔で8個柱穴が存在し、特異な構造であったと考えられる。なお、周壁溝上の柱穴は、間隔から推して本来は9個あったものと考えられる。中央土坑は2基存在したが、南側の方を埋めてから北側の方を使用していたことが土層の観察から確認された。

## 出土土器

(図18-13)

住居址内の柱穴から出土した壺形土器の底部で、外面はタテ方向のヘラ磨き調整を施している。

固化し得ない土器も含めて見ると、これらは第Ⅲ様式古段階に属する遺物であろう。



- |              |               |            |
|--------------|---------------|------------|
| 1. 暗灰色粘質土    | 5. 哈褐色粘質土     | 9. 細灰色粘質土  |
| 2. 灰色褐色粘質土   | 6. 灰褐色褐色粘質土   | 10. 灰褐色粘質土 |
| 3. 暗灰黄色粘質土   | 7. 棕褐色粘質土     | 11. 灰褐色粘質土 |
| 4. 灰層 (灰が多い) | 8. 灰層 (灰が少ない) |            |

図6 S B 02平面・断面図

S B 0 3  
(図 7)

この住居も削平をうけ、柱穴と中央土坑のみが残存していた。柱穴は 4 個確認できたが、その配置から本来は 5 個であったと考えられる。また、その柱穴の配置から径 5 ~ 6 m の円形の竪穴住居であったと推定される。中央土坑は 2 基存在したが、西側を埋めてから東側の方を使用したことが土層の観察から確認された。

出土土器

図化し得る出土土器はないが、小片から中期に属すると考えられる。

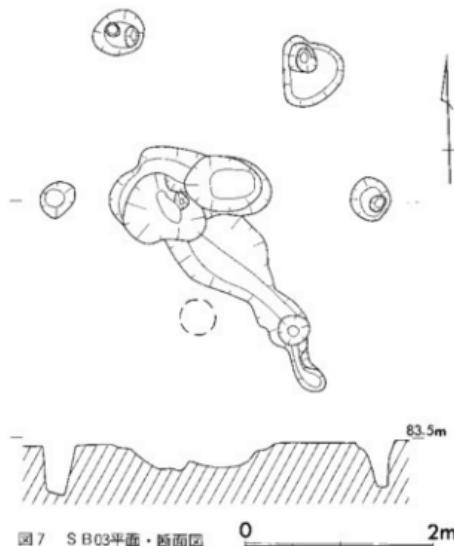
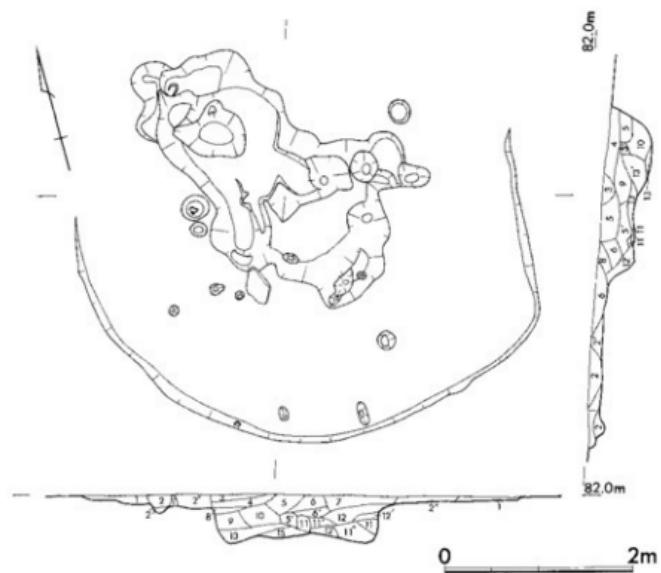


図 7 S B 03 平面・断面図

S B 0 4  
(図 8)

北東付近は、傾斜しているため床面の一部が流出しているが、長径 5m、短径 4.5m の梢円形の竪穴住居である。床面には明確な柱穴の配列は認められず、簡単な構造の屋根がかけられていたと考えられる。屋内には不定形の大きな土坑が設けられ、上層断面の観察から幾度も掘削・埋め戻しが行われていたようである。その埋土上には、多量のサヌカイトのチップが含まれていた。床面にもサヌカイトのチップが散乱しているほか、石鎚や石錐の完成品も埋土中より出土している。一方、上器は細片が若干出土したにすぎない。中央に据えられた長軸 40cm、短軸 22cm の菱形の石も作業台と考えられ、この住居は日常の生活に用いられたものとはしがたく、石器製作の作業小屋であったと考えられる。



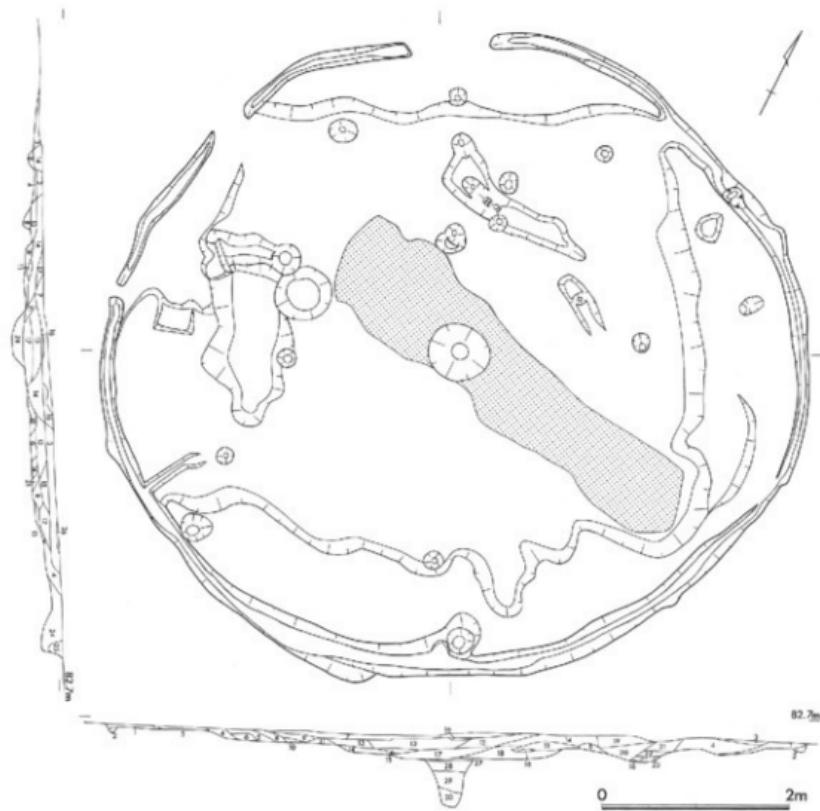
- |                      |                        |                        |
|----------------------|------------------------|------------------------|
| 1 黄褐色粘質土             | 6 噴灰黄褐色粘質土             | 12 灰黃紅色粘土(9のブロック少量含む)  |
| 1' 黄褐色粘質土(1より粘質強い)   | 6' 噴灰黄褐色粘質土(6より暗い)     | 12' 灰黃紅色粘土(9のブロック多く含む) |
| 2 喷灰褐色粘質土            | 7 暗黄褐色粘質土              | 13 暗褐色粘土上:             |
| 2' 喷灰褐色粘質土(2より粘質強い)  | 8 噴紅茶色粘土               | 13' 喷褐色粘土(少量の炭化土)      |
| 2'' 喷黄褐色粘質土(少し香味が強い) | 9 红褐色粘土                | 14 褐灰色粘土               |
| 3 褐褐色粘土              | 10 茶色粘土                | 15 灰茶紅色粘土              |
| 4 灰褐色粘土(3のブロック少量含む)  | 11 黄紅色粘土               | 16 灰灰色粘土(燒土のブロック含む)    |
| 5 噴灰褐色粘土(3のブロック多く含む) | 11' 噴紅色粘土(9のブロック少量含む)  | 17 噴褐色粘質土(一部炭を含む)      |
| 5' 噴灰褐色粘土            | 11'' 黄紅色粘土(9のブロック多く含む) |                        |

図8 S B04平面・断面図

S B05 長径7.5m、短径7mの楕円形の竪穴住居である。幅10~20cm、深さ2~10cmの周壁溝がめぐり、一部削平のためとぎれている部分もあるが、全周していたものと考えられる。柱穴は、円弧を描くように存在するが、直径、深さ、間隔が一定でなく、どのような構造であったかは不明である。屋内には高床部が設けられ、内側の一段低い部分はほぼ東西南北を角とする方形をなしており、各高床部は円弧状を呈する。各高床部は北西辺が最大幅50cm、高さ5cmを測り、他は最大幅1m、高さ10~15cmを測る。中央土坑は他のものに比して深く、径60cm、深さ55cmを測るが、壁面の赤化、炭・灰の堆積もまったくなく、その機能が何であったか否かは断定できない。

竪穴住居が廃棄され自然堆積が進む途中で、幅1m、長さ4.5m程の長方形の土坑が穿たれている(図9のスクリーントーン部分)。土坑内は細かい

炭化材で充填されており、底面は焼け縮まり赤化していた。この土坑がいかなる施設ないしは行為によるものかは不明である。



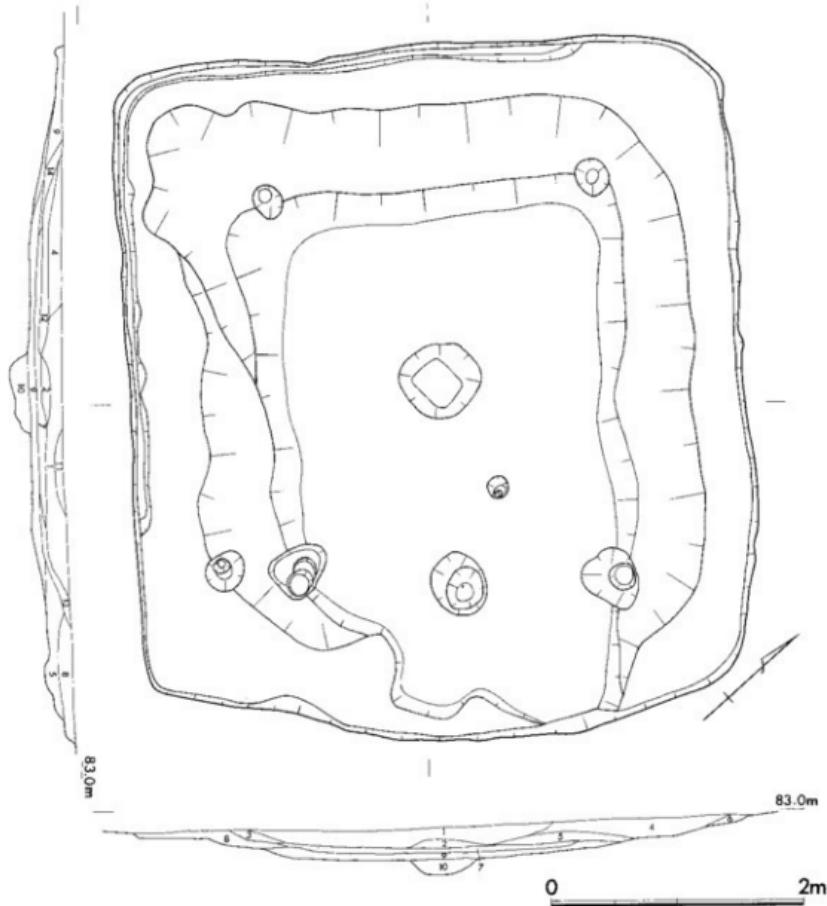
- |                     |                       |                      |
|---------------------|-----------------------|----------------------|
| 1. 灰褐色粘質土           | 11. 灰黃褐色粘質土           | 21. 喀灰茶褐色粘質土(炭を少し含む) |
| 2. 喀褐色粘質土           | 12. 喀黃褐色粘質土(炭を少し含む)   | 22. 黃灰褐色粘質土          |
| 3. 喀灰褐色粘質土          | 13. 茶褐色粘質土(粒を小さくなめらか) | 23. 喀黃灰褐色粘質土         |
| 4. 灰褐色粘質土           | 14. 喀茶褐色粘質土(炭を少し含む)   | 24. 橙灰褐色粘質土          |
| 5. 喀灰褐色粘質土          | 15. 喀茶灰褐色粘質土          | 25. 喀灰橙褐色粘質土         |
| 6. 灰褐色粘質土           | 16. 黄褐色粘質土            | 26. 喀灰茶色土            |
| 7. 喀灰黃褐色粘質土(炭を少し含む) | 17. 黑茶色粘質土(炭を全体に含む)   | 27. 褐色粘質土            |
| 8. 灰茶色粘質土           | 18. 灰土                | 28. にじいオリーブ色シルト質粘土   |
| 9. 黄褐色粘質土           | 19. 喀茶褐色粘質土(炭を少し含む)   | 29. 黑灰色粘質土(土器多く含む)   |
| 10. 喀褐色粘質土          | 20. 喀灰黄褐色粘質土(炭を少し含む)  | 30. 喀灰褐色粘土           |

図9 SB05平面・断面図

- 出土土器 (1)は、広口の壺形土器で、口縁端部には円形浮紋上に竹管紋をスタンプしたものを見付している。なお、口縁部に擬回線を巡らしていたようだが、器表が剥落しているため明確でない。
- (図19-1~3 6・7・11・17・21~23) (2)も、広口の壺形土器で、口縁端部は大きく垂下させ、その内外面は撚波状紋で飾る。
- (3)は、扁球形の体部をもつ細頸壺形土器である。外面はヘラ磨きで丁寧に調整しているが、内面は粘土紐の接合部をそのまま残す稚な仕上げである。
- (6)・(7)はいずれも鉢形土器であるが、その外面の調整は、(6)では粗いハケ目、(7)はヘラ磨き調整である。また、頸部は、(6)ではゆるやかに、(7)では「く」の字形に外反させる。
- (11)は、口縁部を大きく外反させる高杯形土器の杯部上半である。器表が剥落しており、調整などは不明である。
- (17)は、甕形土器であろうが、体部が細身である。外面は僅かにタタキ目が観察できる。
- (21)~(23)は、製塩土器の脚部である。(23)は外面をナデているが、タタキ目を残し、(22)はすべてナデ消している。(21)は脚部が短く、外面はナデ調整を施している。他に脚部が7点、体部が数十片出土している。体部内面は平滑にナデ仕上げを施している。これら製塩土器の大部分は中央土坑より出土している。
- いずれも、第V様式後半に属するものであろう。
- S B 0 6 (図10) 一辺5mの方形の竪穴住居で、柱穴は対角線上に4本と、それに付随するかのような位置に1本存在する。屋内の施設としては、径60cm、深さ10cmの隅丸方形ぎみの中央土坑と、高床部が地山を削り出して三辺に設けられている。高床部は、床面から明確な段ではなく緩やかな傾斜で立ち上がり、周壁付近のみ幅30~40cmにわたって平坦となっている。床面から高床部平坦面までの高さは10~20cmを測る。周壁溝は北西辺と南西辺の二辺に3分の2程度設けられており、幅15cm、深さ2cm程を測る。南東辺の幅1.6mにわたって屋内高床部の切れる部分は、入口と考えられるが、その部分の床面には石錘や粘土がおかれていて、入口として不自然な感もある。また、入口と考えられる部分と中央土坑との間、南東辺に沿う2柱穴のほぼ中間に、径50cm、深さ45cmのピットが設けられている。この深いピットの底には鉢形土器が倒立した状態で置かれていた。
- 出土土器 (4)は、床面に密着した状態で出土した小型の壺形土器で頸部付近にタタキ目を残している。
- (図19-4・9)

(9)は、ピットの底から倒立した状態で出土した壺形土器で、内外面ともに板状工具によるナデ調整が施されている。

いずれも、第V様式後半に属するものである。

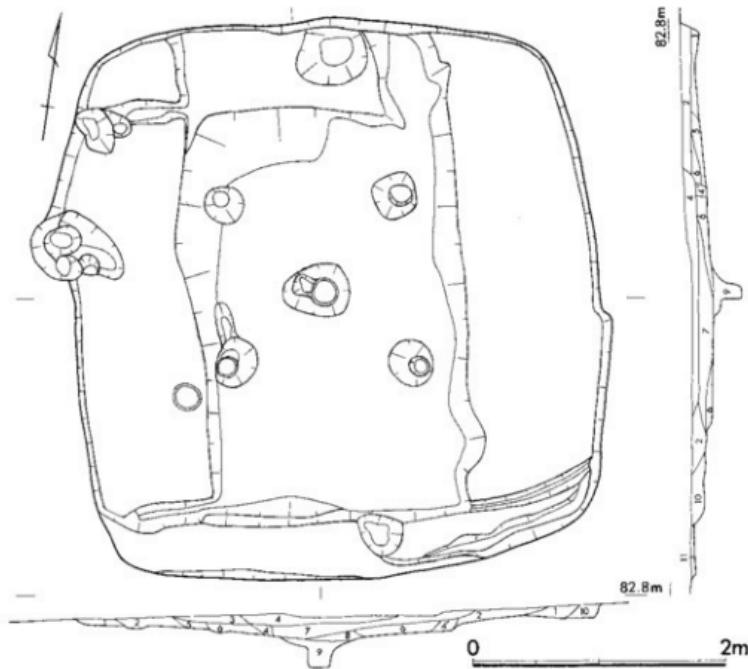


- |                     |                     |                  |
|---------------------|---------------------|------------------|
| 1. 黄褐色粘質砂           | 6. 淡黄褐色粘質砂          | 11. 淡灰褐色粘質砂      |
| 2. 淡黃灰色細砂           | 7. 淡灰色粘質シルト         | 12. 淡黃灰色粘質砂      |
| 3. 淡黃色粘質砂           | 8. 淡黃灰色砂（1cm前後の疊合む） | 13. 淡灰褐色粘質シルト    |
| 4. 淡灰褐色砂（1cm前後の疊合む） | 9. 淡灰色粘質砂           | 14. 淡灰褐色粘質シルト    |
| 5. 淡黃色粘質砂           | 10. 灰色粘質砂           | 15. 淡黃灰色粘質砂（疊合む） |

図10 SB06平面・断面図

S B 0 7  
(図11)

一辺4mの方形の竪穴住居で、柱穴は対角線上に4本存在するが、柱穴間が1.3~1.5mと一般的なものに比して狭い。S B 06と同様に柱穴1本が付随するかのような位置に存在する。中央には、長径55cm、短径40cm、深さ30cmの中央土坑が存在する。屋内高床部が3辺に設けられ、東辺・西辺が幅1m、北辺で幅60cm、高さ5~10cmを測り、いずれも地山を削り出したものである。高床部は三辺同一面でめぐっているのではなく、東辺と北辺の間は幅50cmにわたって切断され、北辺と西辺の間は僅かな段をなし、さらに北壁から50cmの部分で幅20cmの溝で切断されている。高床部の存在しない南辺は、幅50cmの拡張が行われている。北辺壁際には、径50cm、深さ20cmの土坑が存在し、貯藏穴と考えられる。



- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 1 暗灰黄色粘質土          | 6 灰褐色粘質土 (2cm大的礫少量含む) |
| 2 暗黃褐色粘質土          | 7 灰黃褐色粘質土 (2cm大的礫少含む) |
| 3 灰黄色粘質土           | 8 灰褐色粘質土              |
| 4 暗黃褐色粘質土          | 9 茶灰色粘土               |
| 4' 暗黃褐色粘質土 (4より暗い) | 10 灰褐色粘質土 (炭含む)       |
| 5 暗灰褐色粘質土          | 11 黄灰色粘質土 (炭含む)       |

図11 S B 07平面・断面図

出土土器

出土遺物の大部分は床面に密着した状態で出土している。

- (図19-8・10) (8)は、小さな突出する底部を有する壺形土器である。体部下半は縦方向、  
・12-16・20) 中位は横方向のヘラ磨き調整を施している。おそらく大型の細頸壺であろう。

(9)は、口縁部を屈曲させ、立ち上がりをもたせた鉢形土器で、その内面には2帯の擬凹線紋を巡らせていている。内外面ともにヘラ磨き調整を施している。

(8)は、頭部にしまりがなく鉢形土器か壺形土器か区別し難い土器である。体部外面はタテ方向に強くひきずったようなナデ状の調整を施している。

(10)・(11)・(12)は、壺形土器ないしは鉢形土器の底部で、タタキ目はそのまま残している。(10)は底部から体部が直線的に立ち上がっており、他の2点と形態を異にする。

(20)は、製塩土器脚部で、外面にはタタキ目を残す。

いずれも、第V様式後半に属するものである。

S B 0 8

大部分が調査地区外に存在しているため、その規模は確定できないが、一辺6m程度の方形の竪穴住居と考えられる。柱穴は全く検出されておらず不明で、地区外に存在するものと考えられる。幅20cm、深さ7cmの周壁溝がめぐっており、地山を削り出した幅1mの高床部が設けられている。しかし、高床部上のはば中央には幅20cm、深さ7cmの別の溝が存在することから、一辺4m程度の住居が拡張ないしは建て替えられたものと考えられる。北辺のはば中央部、建て替え前の住居の周壁溝から、建て替え後の住居の周壁溝上にかけて、径60cm、深さ55cmの隅円方形ぎみの土坑が存在し貯蔵穴と考えられる。貯蔵穴の埋土中からは投弾2個が出土している。

出土土器

(図19-5) 床面に密着した状態で出土した鉢形土器で、内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。第V様式に属する。

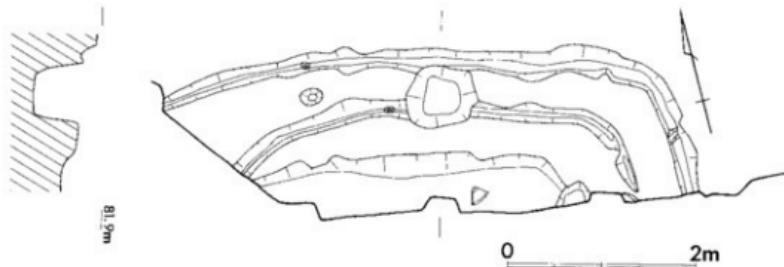


図12 S B 08平面・断面図

## 2. 掘立柱建物

調査地区内では径20~40cm、深さ10~50cmの多数の柱穴が検出された。これらは掘立柱建物の柱穴で、建物としての組合せが判明したのは16棟で、平地式掘立柱建物と高床式掘立柱建物にわけられる。弥生時代の高床式掘立柱建物は梁間1間に限られるようで、桁行1~3間がもっとも多いという平面的な特徴を有し、それ以上に復元されるものは、平地式掘立柱建物と考えた。しかし、遺構検出面はかなりの削平を受けており、床面の状況から平地式掘立柱建物と確定できるものは存在しなかった。

掘立柱建物についてはその性質上明確に伴う遺物の確定は困難である。そうした中で、図18-1・14はSB09の南西隅の柱穴から出土したもので、柱穴を抜き去るか、腐朽した後に入れられたと考えられる。

出土土器

(図18-1・

14)

(1)は、短頭直口の壺形土器で、体部下半は剥落で明確ではないがヘラ磨きで、上半はハケ目調整を行っている。

第三様式に属するものであろう。

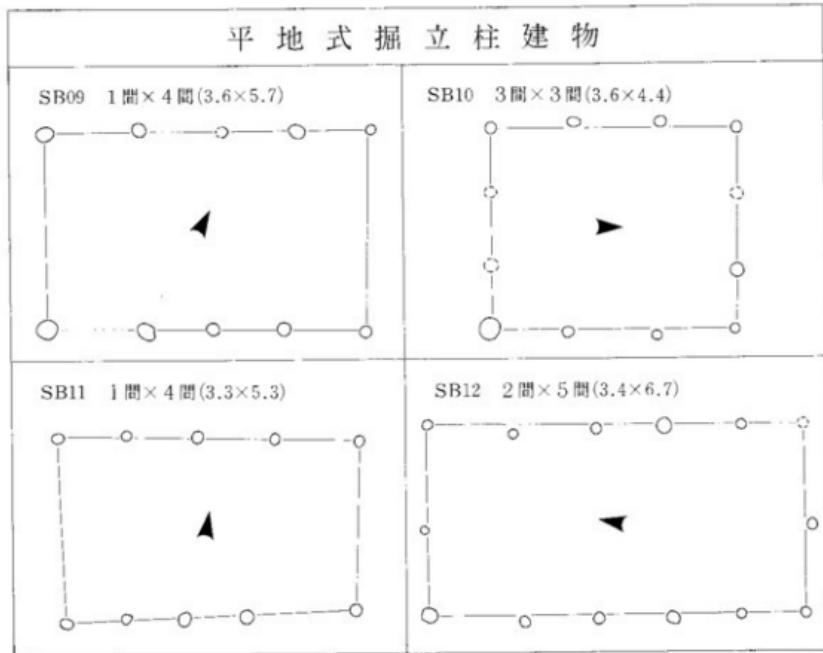


図13 掘立柱建物平面図(1)

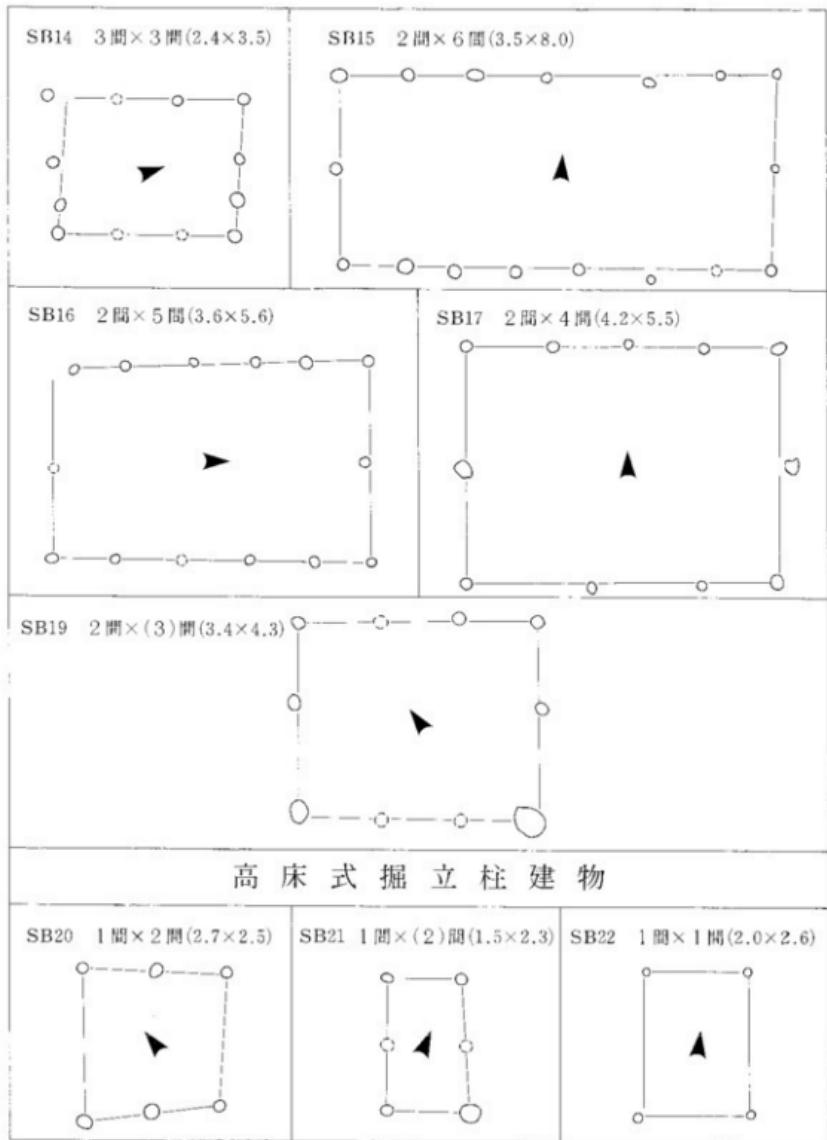


図14 掘立柱建物平面図(2)

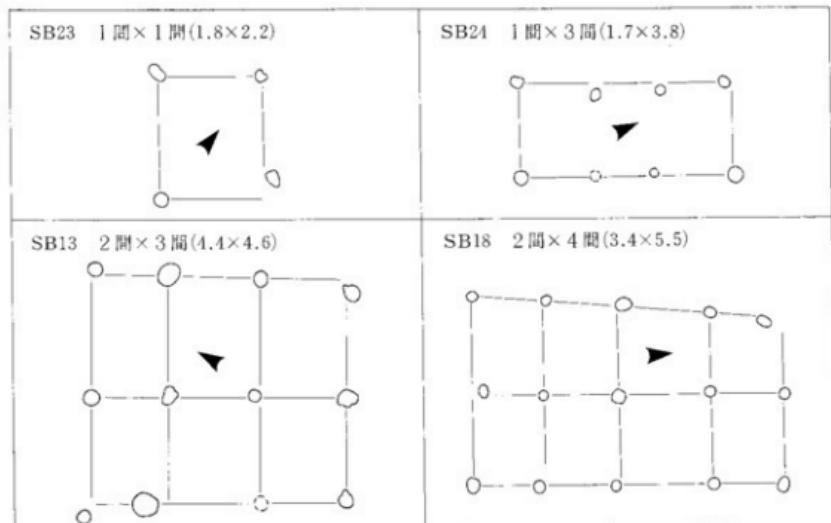


図15 摂立柱建物平面図(3)

### 3. その他の遺構

S X 0 1

平面形は5.5×4mの不定形なもので、壁面の立ち上がりもゆるやかな傾斜で、その深さは30cm程度である。床面のほぼ中央には0.6×1.5mの長方形で深さ30cm程度の上坑が存在する。埋土中には遺物がほとんど含まれていなかつたが、僅かに古墳時代・鎌倉時代の須恵器の細片が出土している。

S X 0 2

東西2m、南北1.5mの不定形な落ち込み状の遺構で、深さは5~20cmを測る。南西付近はさらに幅35cm、深さ20cmの溝状に落ち込んでいる。

出土上器

細片の土器が数多く出土しているが、図化し得たのはこの製塩土器の下半部のみである。外面は粗いタタキ目を施し、内面は板状工具によりナデ上げている。他に脚部2点がみられる。

S K 0 1

1.6~1.3m程度の不定形の上坑で、深さは50cm程度である。埋土中には弥生土器片のほかに灰・炭・焼土塊が含まれていた。

出土土器

(2)は、口縁部がやや開くが、直口の壺形土器で、口縁部端面に刻み目を(図18-2・6・)施す。

8・11・15) (6)は、(2)と同じく口縁部がやや開く直口の壺形土器で、頸体部の境に複帶構成の櫛描直線紋を巡らす。

(II)は、体部がわずかに径を上回る壺形土器で、口縁端部は上方へわずか

に肥厚させる。

第III様式古段階に属するものであろう。

- S K 0 2 一辺1m前後のいびつな方形の土坑で、深さは5cm程度と残存状況はよくない。底面に付いて太形蛤刃石斧の基部と河原石が出土した。
- S K 0 3 0.7×0.8mの楕円形で、深さ0.3mの土坑である。埋土中から弥生土器  
(図17) ・サヌカイト片が出土している。
- 出土土器 水平な口縁部を有する高杯形土器で、内側の突帯は顯著ではないが、三角形状に突出する。第III様式古段階に属する。  
(図18-7)

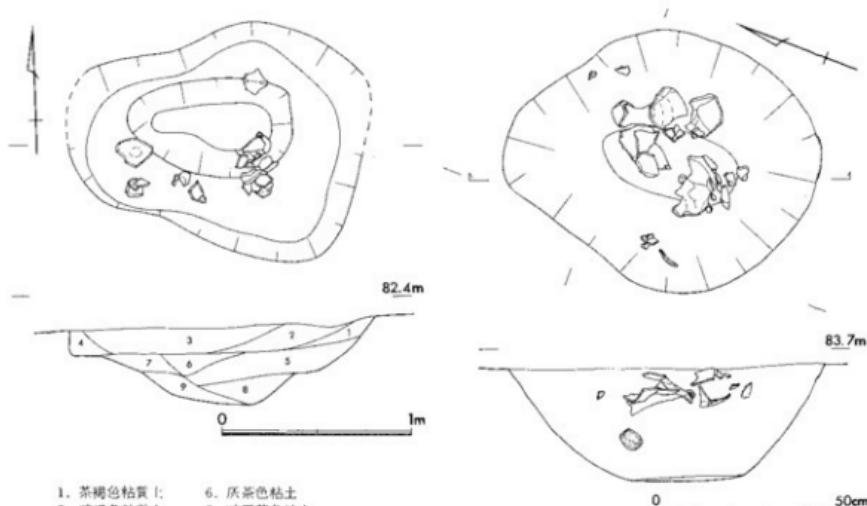


図16 SK01平面・断面図

S D 0 1 S B08に接して存在する構状の遺構で、幅・深さともに一定せず、その用途は不明である。底面からは浮いた状態ではあるが、弥生土器・サヌカイト片が出土している。

- 出土土器 (10)は、体部上半が比較的張る瓣形土器で、口縁端部は肥厚させず丸くおさめる。内面の底部付近は指圧痕を残す。  
(图18-9・  
10) (9)は、高杯ないしは台付壺・鉢形土器の脚台部である。  
いずれも、第III様式古段階に属する。

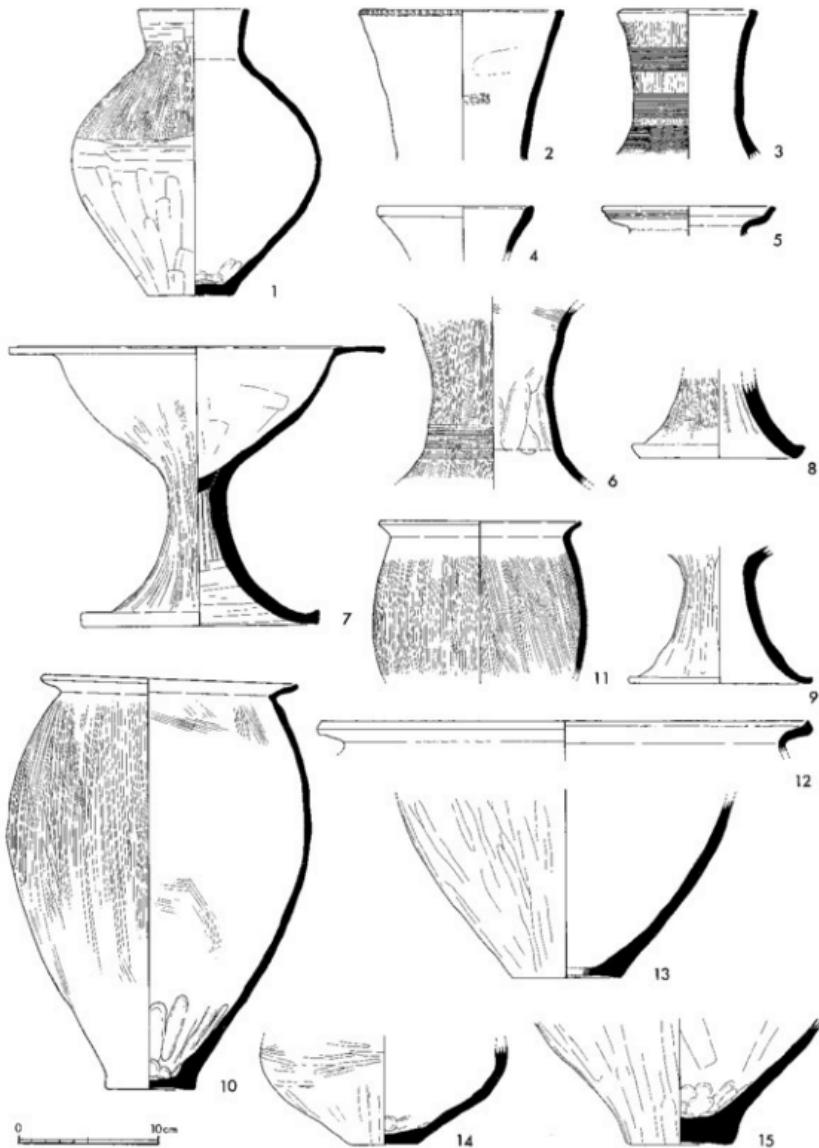


図18 弥生時代中期土器 (SB01:4-12, SB02:13, SB05:1-14, SK01:2-6-8-11-15, SK03:7, SD01:9-10)

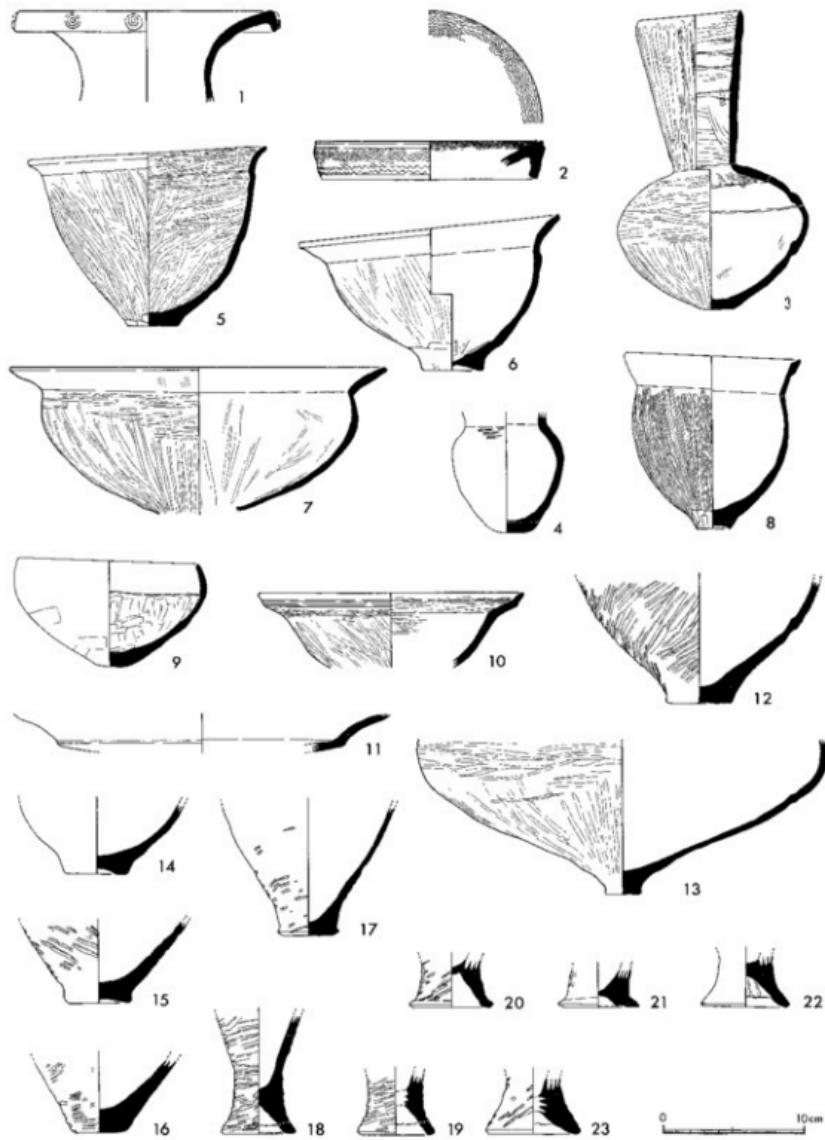


図19 弥生時代後期土器 (SB05: 1~3・6・7・11~17・21~23, SB06: 4~9, SB07: 8・10・12~16・20, SB08: 5, SX02: 18・19)

#### 4. 石 器

##### 石 鋸

(図20・21) 石鋸と認定し得るものは、欠損したものを含め21点出土している。うち11点がSB01からの出土で(1・4・6・8~10・12・14・19~21)、焼土、炭層中に含まれていたものである。従って、住居焼失時のものと考えられる。

石器製作の工房址と考えられているSB04からは2点(3・5)、SB02から3点(2・11・18)、ピットから単独で出土したもの2点(13・16)で、他の3点(7・15・17)は遺構などへの流入土中に含まれていたものである。

形態的には、凸基有茎式(1~4)、凸基無茎式(5~9、5・7は尖基式、9は円基式)、平基式(10~15)、凹基式(16~18)があり、残り3点は基部欠損のため不明である。

(16・17)のように深い押圧剥離によって丁寧に調整されたものもあるが、多くは大剥離面を残したままである。従って、断面の形態も扁平なものが多い。

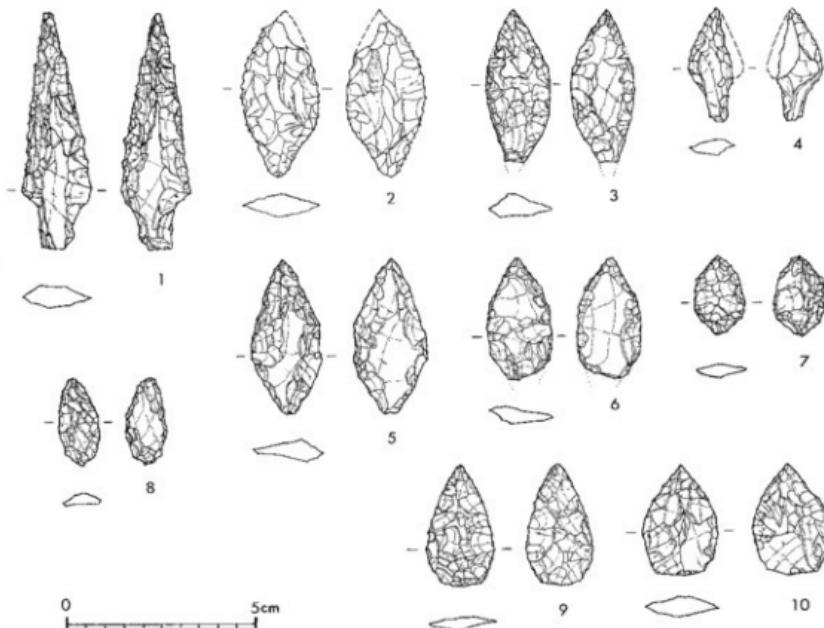


図20 石鋸(1)

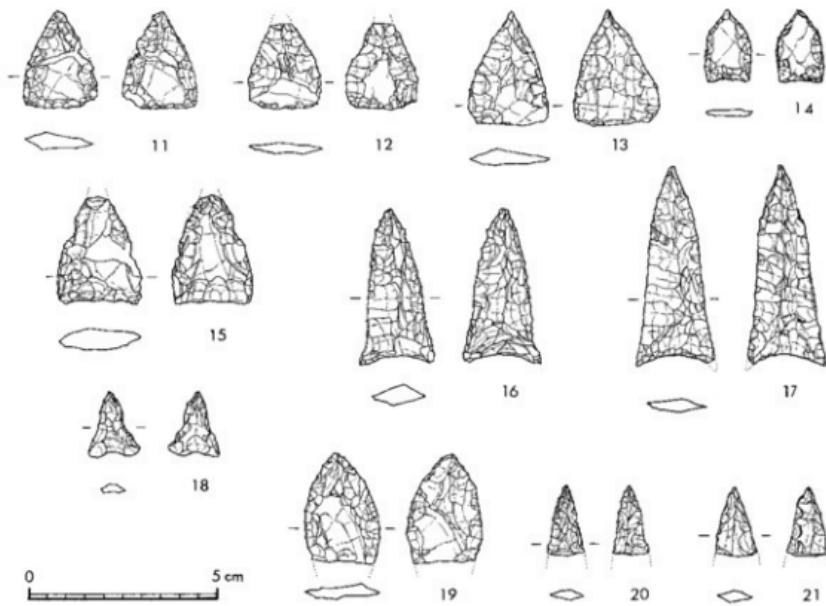


図21 石錐(2)

### 石錐

(図22)

出土数は5点と少ない。石錐の出土の多かったSB01からは2点(1・4)、石器工房址と考えるSB04からも2点(2・5)、(3)はピット内からの出土である。

形態的には、頭部が扁平なもの2点(1・2)、頭部が棒上のもの(3～5)とに分けられる。

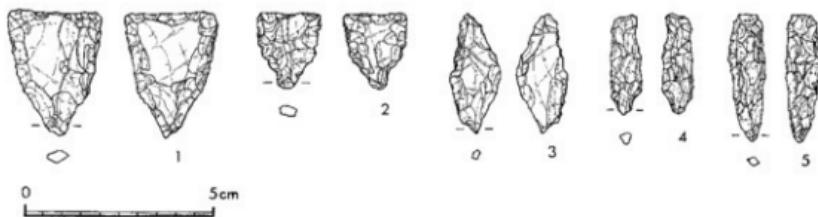


図22 石錐

**砾 石** (図23) 4点出土しており、(1)・(2)はSB07、(3)はSB05、(4)はSB01からのものである。いずれも砂岩系で、荒砾である。

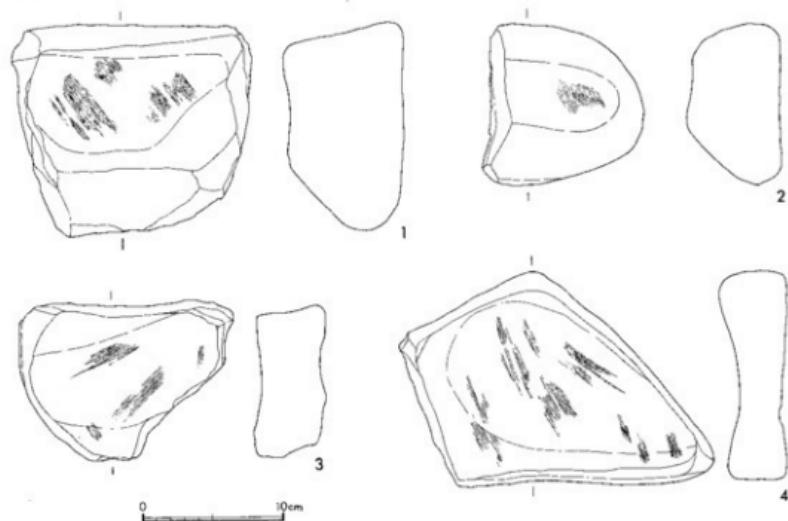


図23 砾石

**投 弹** (図24) 自然の円碟であるが、SB07で3点(2~4)、SB08で2点(5・6)が同一場所で出土している。

いずれも、後期に属するものである。

**石 斧** (図24) SK02出土で、刃部のある下半部は欠損している。

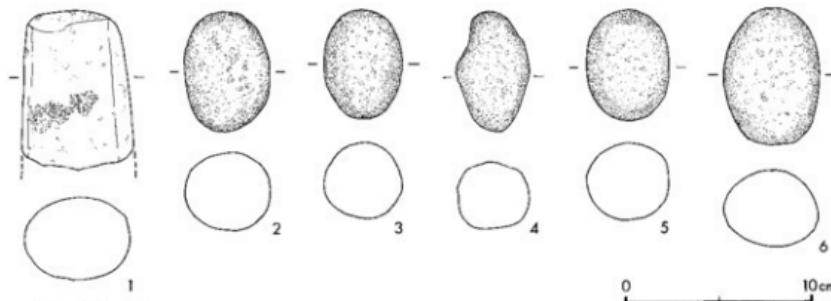


図24 石斧、投弾

以上の他に、図25のサヌカイト製石器がピット内から出土している。これはピット壁面の地山近くにくい込んだ状態で出土したので周辺の地山を掘削したが、石器および剝片の出土はなかった。削器であろう。

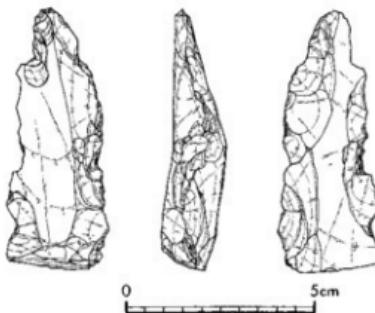


図25 削器

## 5. 玉類

ガラス玉1点(1)、碧玉製管玉5点(2~6)が、SB01の床面から出土している。

ガラス玉

ガラス玉は明るい青緑色で、径5.5mm、厚さ3.5mmである。

管玉

管玉は、(2)と(6)が濃緑色、(3~5)が淡灰緑色で、大きさは、(2)が長さ6.7mm、太さ2.7mm、(3)が長さ8.5mm、太さ2.1mm、(4)が長さ5.6mm、太さ2.1mm、(5)が長さ5.7mm、太さ2.0mm、(6)が長さ4.7mm、太さ2.1mmである。

(図26)

これらの玉類は、床面直上の堆積土を採集し、水洗選別した結果発見されたもので、同一箇所に集中して存在したものと推察される。

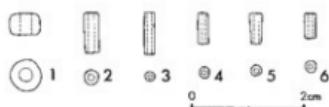


図26 玉類 (1:ガラス玉、2~6:碧玉製管玉)

## 第Ⅳ章　まとめ

### 緒　緯

舞子丘陵における考古学的発掘調査は横穴式石室を主とし、1950年代後半に始まり、今まで幾多の成果を納めてきた。その中で、分布調査において弥生土器片や石器が採取され、古墳の調査においては石室内やその周辺から石鏡等が出上り、弥生時代の遺構の存在が予測されていた。

1982年、舞子古墳群東石ケ谷1号墳の調査において、初めて住居址の存在が確認され、続いて1984年の同地点隣接地における調査、1986年の昆沙門1号墳における調査でも住居址が確認された。そして、これらはいずれも弥生時代後期の住居址であった。しかし、石鏡等の石器を有する中期の遺構の存在は確認できていなかった。今回3000m<sup>2</sup>近くの調査で初めて中期の住居址等を確認できたのは、当遺跡の存続期間が判明したことだけに留まらず、その性格を考えるうえで重要である。これは、当遺跡の立地が付近の水田面との比高差75mを測り、いわゆる高地性集落の範疇に属するものであるからである。

### 存続時期から みた性格

神戸市域は旧国播磨と摂津にまたがる。その境は、六甲山系が海に落ちる須磨区境川付近であるといわれている。播磨に属する明石川流域、摂津に属する六甲山系南麓の両地域で、数多くの高地性集落の存在が知られている。しかし、両地域の高地性集落はその存続期間が異なっている。明石川流域のそれは、早いものは前期末の遺物を出土するが、最も栄えるのは第Ⅳ様式で、廃絶するのも第Ⅳ様式のうちである。六甲山系南麓のそれは、ほぼ中期中葉に開始し、後期にまで継続するものが大部分である。

これは高地性集落が、「政治的緊張」「戦」によって成立・継続したという視点に立てば、ただ単に遺跡の存続時期という問題に留まらず、その遺跡（地域）がいつ「政治的緊張」に巻き込まれ、いつ終えたかという時期を表すものである。当遺跡の存続期間は第Ⅲ章で記したように、第Ⅲ様式古段階に開始し後期後半にその終焉を迎えていた。したがって、当遺跡は地理的に近接する明石川流域よりも、六甲山系南麓の高地性集落と同一の軌跡をたどっているといえよう。

### 立地からみた 性格

後期の高地性集落は、畿内においては一般的であり、当遺跡はその最西端に位置することになる。また、淡路島の北淡町おぎわら遺跡も後期の高地性集落で、東を除く三方に視界が開け、北は明石川流域、西は家島・小豆島、南は四国を望むことができる。当遺跡とともに、畿内の玄関口—明石海峡をおさえる重要な集落であったと考えられる。

遺構からみた  
性格

当遺跡の遺構は竪穴住居に留まらず、高床式の掘立柱建物、平地式の掘立柱建物も出土している。平地式の掘立柱建物は明石川下流域の玉津・田中遺跡において明確な例が確認され、大型の土器20個体がその床面に残されていたことから倉庫として使用されていたと考えられている。高地性集落の平地式の掘立柱建物は、県下では三田市平方遺跡において尾根先端部で1棟確認されているのみで、その用途については不明である。<sup>註1</sup> 三形態の建物はそれぞれに使い分けられていたのだろうが、いま明らかにしがたい。また、弥生時代には一般的でない総柱の掘立柱建物2棟も出土しており、その用途についても明らかでない。しかし、様々な形態の建築物が存在するということは、危急時の逃げ城的な性格の集落ではなく、當時人々が住む西へ向けての監視所的な集落であったと考えられる。ただ、當時住むとはいうものの、低地に立地する一般的な集落とは異なった点が存在する。それは、石鐵・石錐等の石器は出土するものの、生産用具のひとつである石庖丁が見られないことである。これは明石川流域の高地性集落において顕著に見られる現象であり、丘陵下の母村からの物資調達を考えている。当遺跡における高床式の倉庫は、當時住むがゆえに大量の穀類を備蓄しなければならず、そのためのものであったのだろうか。

監視所的なこの集落も、当地域で最も高地性集落が栄える第Ⅳ様式に、戦いに直面したことでもあったようである。それはS-B01の検出状況から考えられる。焼け落ちた上屋、その中に残されたものは石鐵11点、ガラス玉1点、碧玉製管玉5点である。石鐵11点のうち欠損している2点は大型の凸基有茎式石錐の先端部と考えられる。日常容器である土器類の出土は乏しいが、攻め落とされた住居という感は充分である。

おわりに

以上が今回の調査成果から見た当遺跡の性格についての考察であるが、予測的な部分が多く、周辺地域も含めた今後の調査成果で補填、修正を加えて行きたい。

註1 後神泉・佐伯二郎『神戸市垂水区舞子古墳群の分布および測量調査報告』  
神戸大学考古学研究会調査報告1 1988

註2 口野博史『舞子古墳群東石ヶ谷1号墳』『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』1985

註3 渡辺伸行・菅本宏明『舞子東石ヶ谷遺跡』『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』1987

註4 山本雅和『舞子古墳群昆沙門1号墳』『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』1989

註5 丸山潔『新方遺跡発掘調査概要』1984ほか

註6 森岡秀人『新修芦屋市史 資料編1』1976

森岡秀人『東六甲の高地性集落』(上) (中)『古代学研究』96, 97 1981, 1982

註7 兵庫県教育委員会 長谷川貞氏の御教示による。1988年度調査で出土した住居址は、第Ⅴ様式初頭および前葉であるが、土器自体は中期、後期後半に属するものも存在している。

註8 兵庫県教育委員会『玉津・田中遺跡 現地説明会資料II』1986

註9 藤宮正『兵庫県三田市平方遺跡の調査』『第6回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』1988



# 写 真 図 版





1. 調査地周辺航空写真(明石海峡、淡路島を望む)

図版2



1. 調査地区航空写真(上が北)

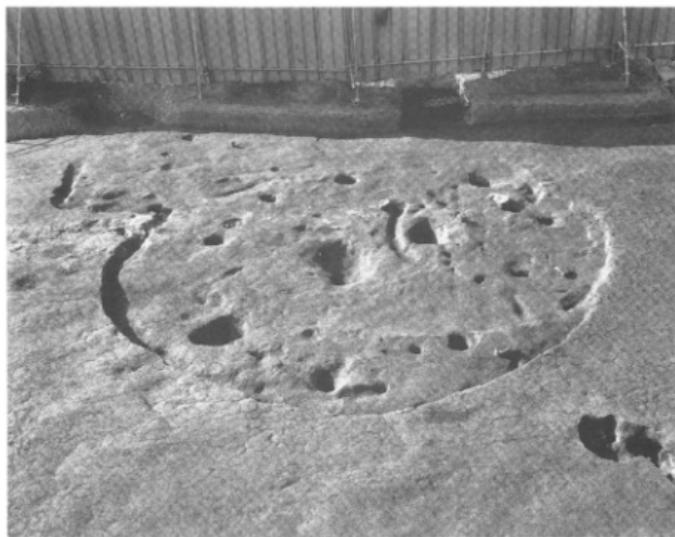


1. SB01 炭化材出土状況(西から)

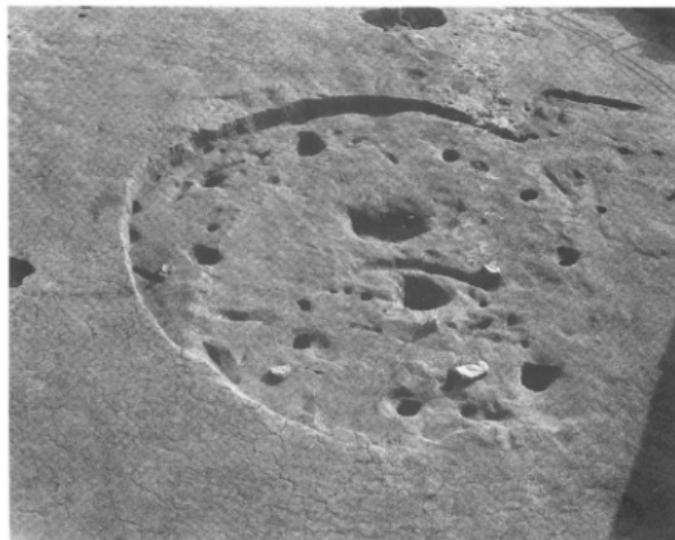


2. SB01 炭化材出土状況細部(北から)

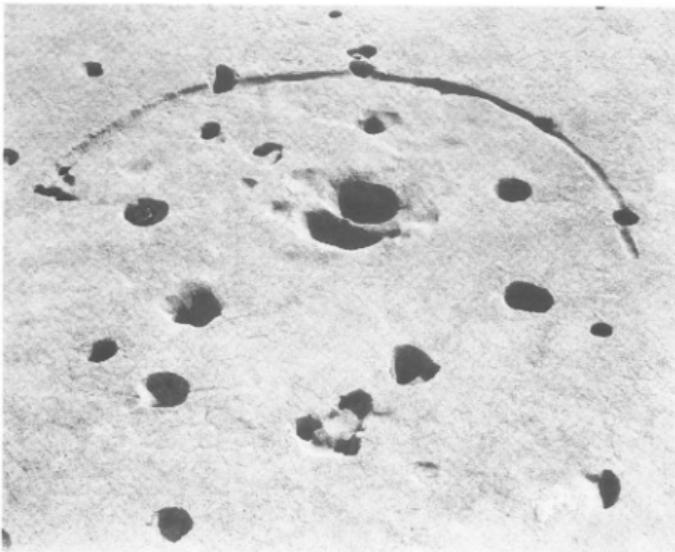
図版 4



1. SB01(南から)



2. SB01(西から)

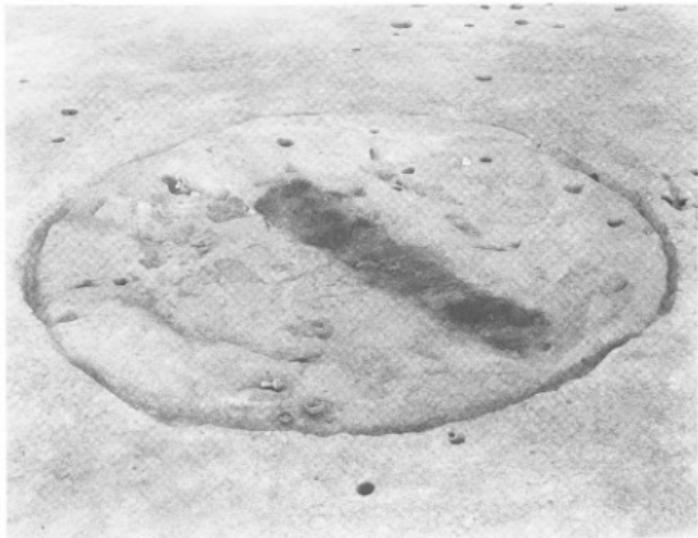


1. SB02(北から)



2. SB03(東から)

図版 6



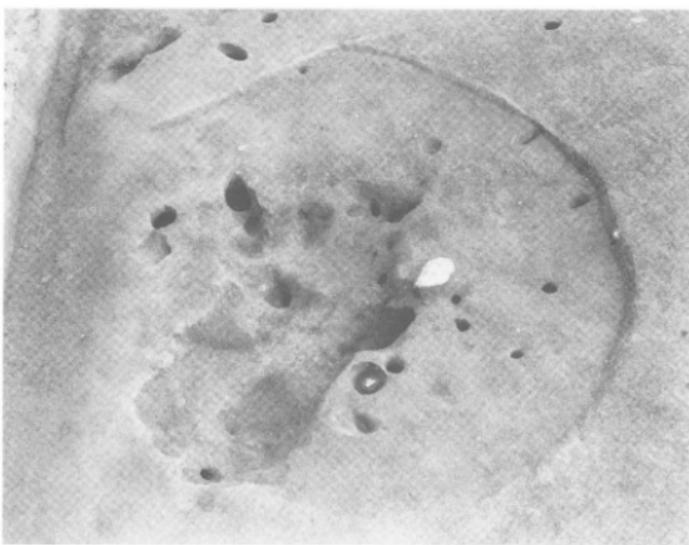
1. SB05(南から)



2. SB05(北から)

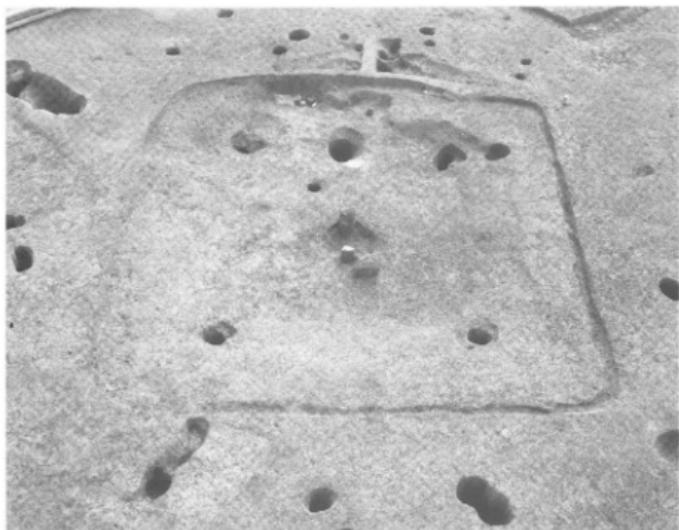


1. SB05土器出土状況(南から)

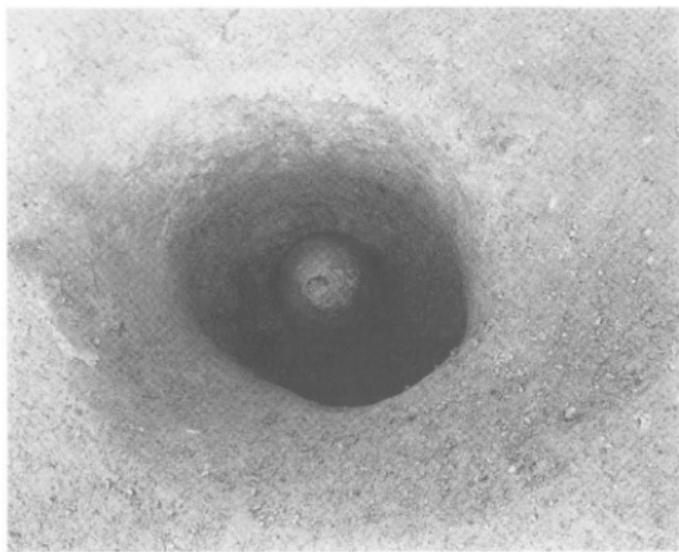


2. SB04(西から)

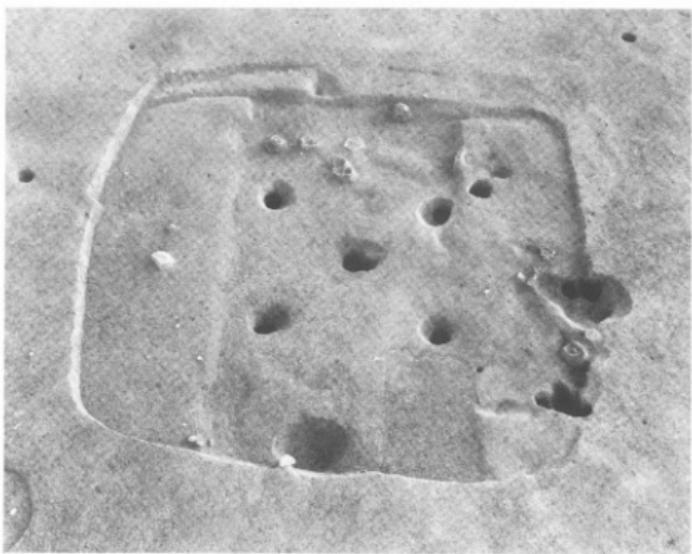
図版 8



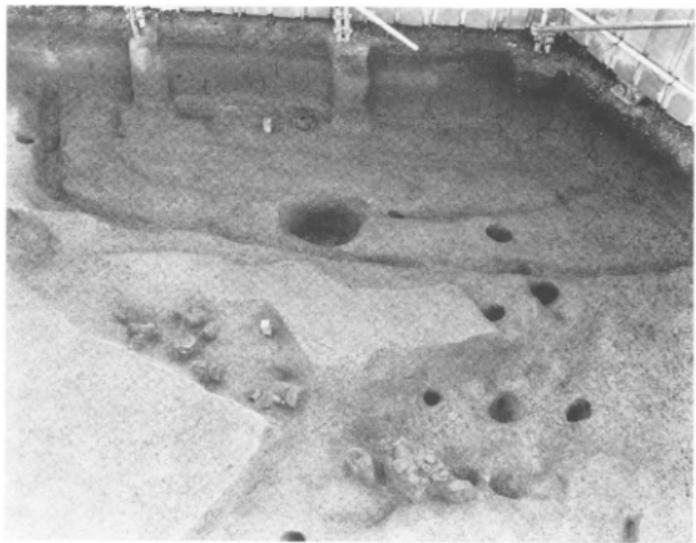
1. SB06(北西から)



2. SB06ピット内土器出土状況

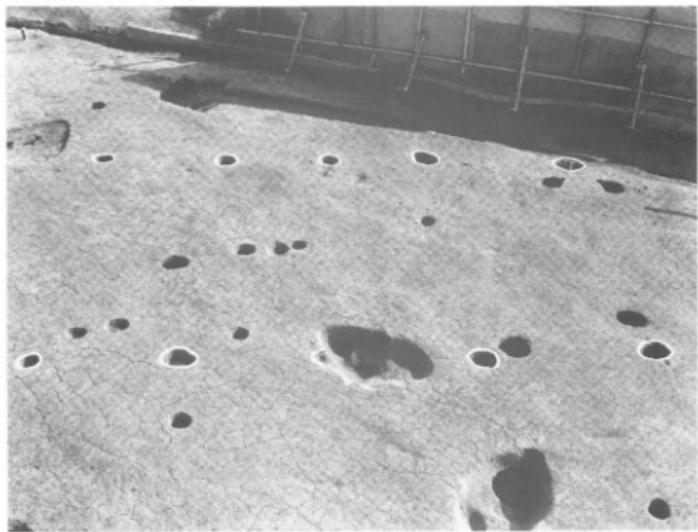


1. SB07(北から)



2. SB08、SD01(北から)

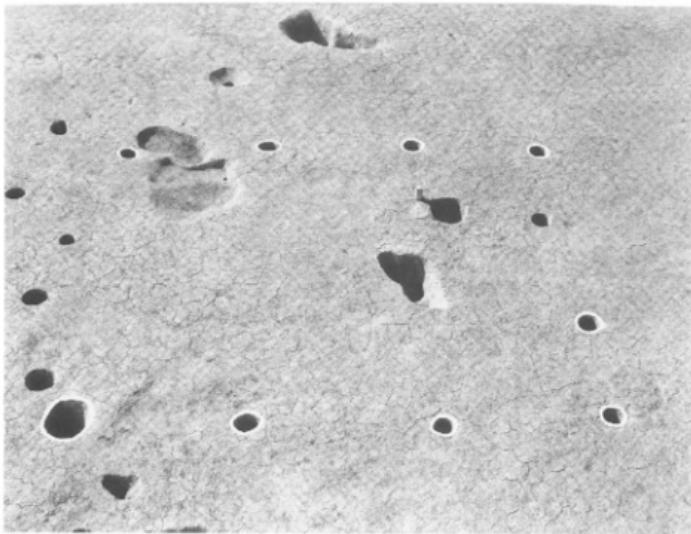
図版10



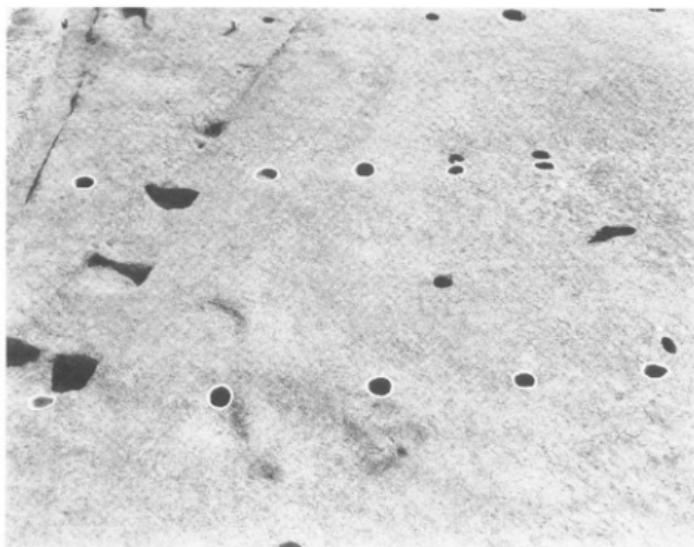
1. SB09(北西から)



2. SB09柱穴内土器出土状況

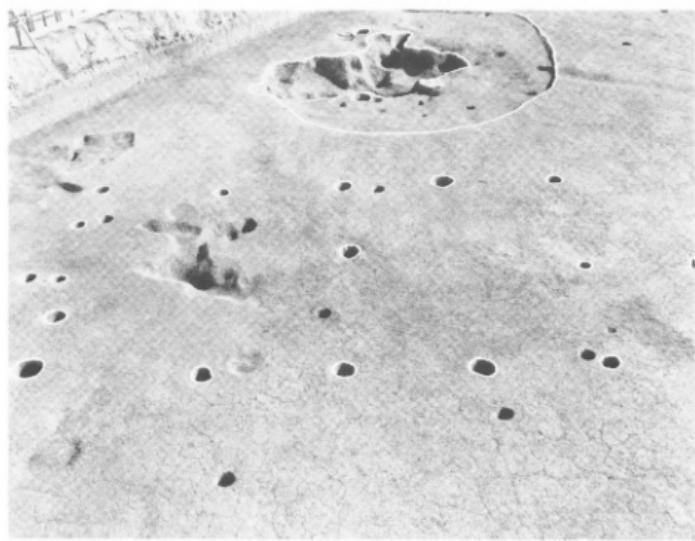


1. SB10(西から)

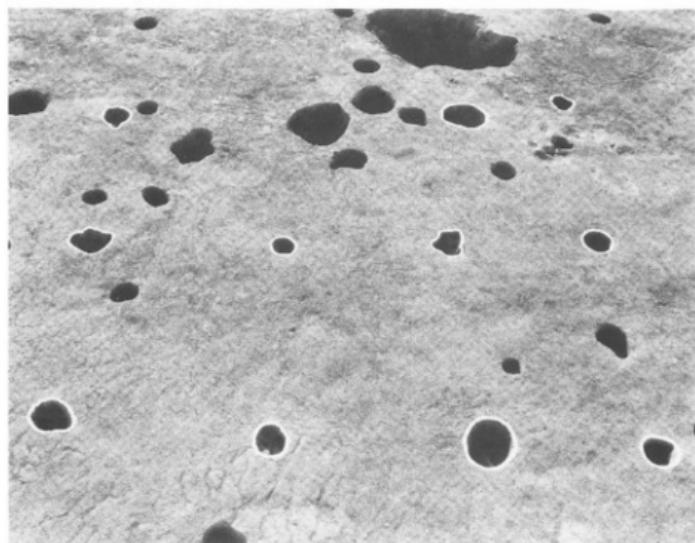


2. SB11(北から)

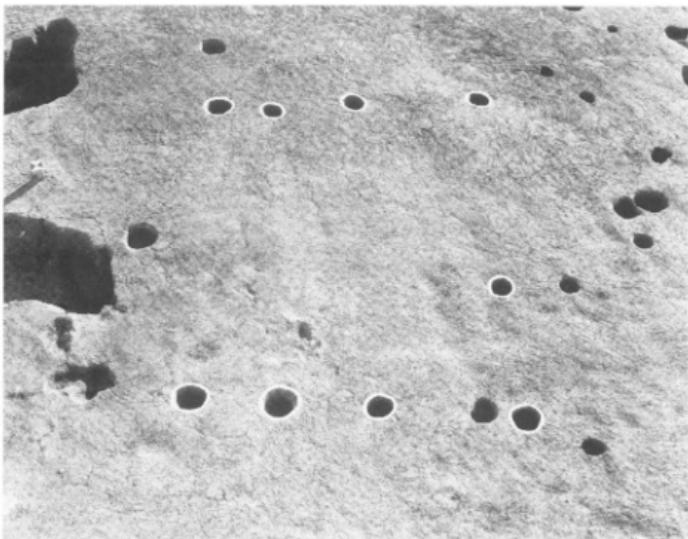
図版12



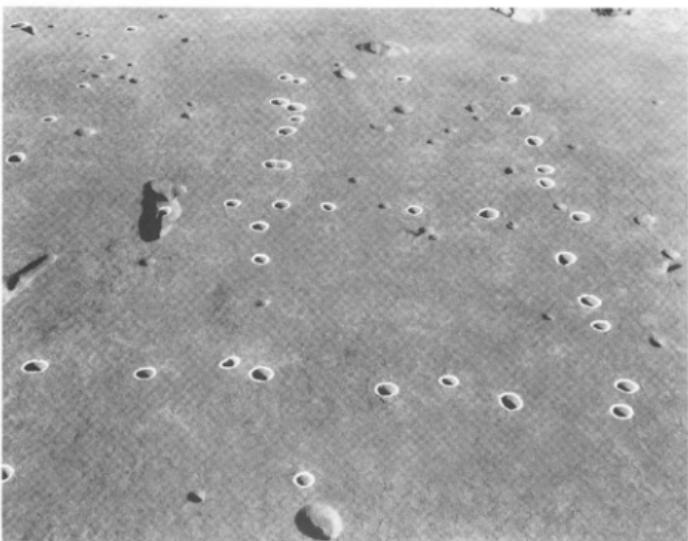
1. SB12(西から)



2. SB13(東から)



1. SB14(北から)

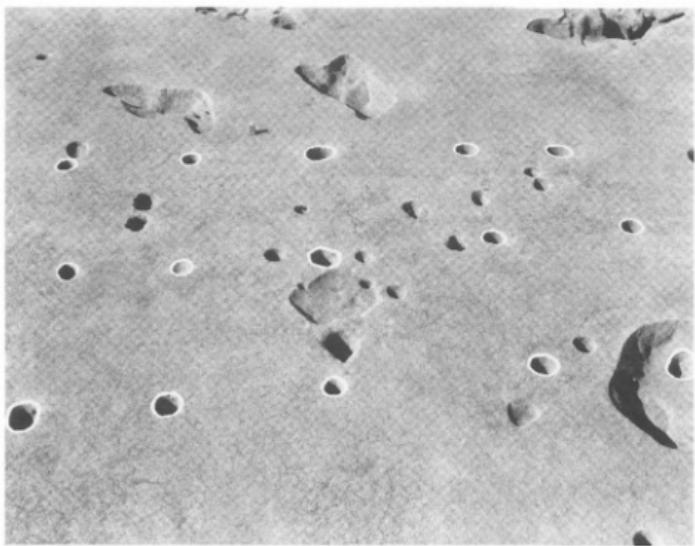


2. SB15・16(東から)

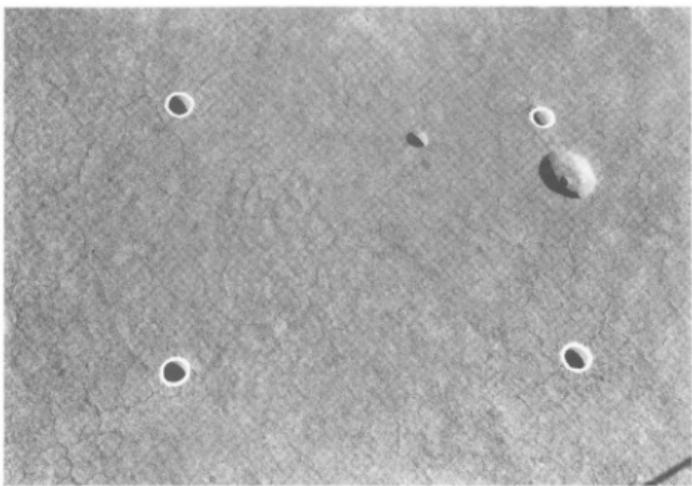
図版14



1. SB17(北から)



2. SB18(東から)



1. SB22(東から)



2. SK 03土器出土状況

図版16



1 : SB 09 2 : SD 01 3~5 : SB 05



1・2 : SB 06

3 : SB 07

4 : SB 08

5 : 石 鎏



## 舞子・東石ヶ谷遺跡Ⅱ

1990. 3. 31

発 行 神 戸 市 教 育 委 員 会

神戸市中央区加納町6 丁目5番1号

印 刷 大 神 印 刷 株 式 会 社

神戸市兵庫区本町1 丁目4 番21号

広報印刷物登録 平成元年度第243号(A-6類)